

考えるということ

街へ、時代へ、跳びだした **東北大学文学部**
ブックレット

ISSN 1882-434X
東北大学文学部・文学研究科
July 2011 Vol. 6

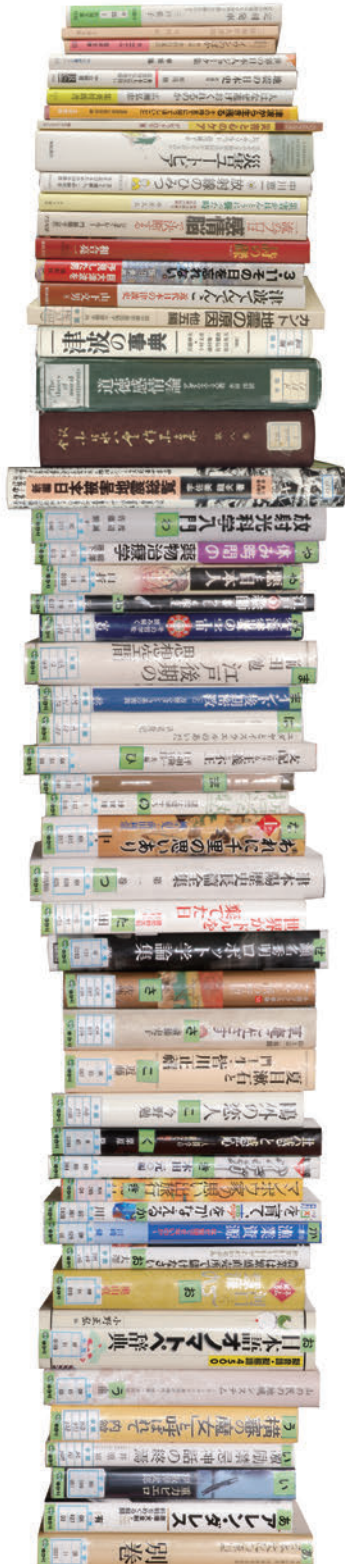
この本の立場 ▶ 実利偏重・通俗功利主義がはびこる時代、東北大学文学部・文学研究科は、あえて「人文知の価値」を示したいと思います。この本は、軽微浮薄な文化への対立軸としての重厚な伝統的学問文化を守り、発展させる媒体です。現実の問題から目をそらすものではありません。「企業の社会的責任」を意識する先進的な企業と対話・連携し、あるいは書店や図書館、地域社会との対話を通して、人文社会学的立場から、責任を持った発言をしていきます。さらに、大学で学びつつある、あるいはこれから大学で学ぶとする若い世代に、「真の実学」としての人文社会学の心髄を伝えたいと思います。ネットを中心に、匿名性を隠れみのとした無責任な発言が、なんとあふれかえっていることでしょうか。この本では、研究者・高校生・大学生・卒業生・企業・地域社会を結んで、＜文学部流＞を徹底したらこうなる、という情報の発信をめざしていきます。

巻頭特別対談

心理学 阿部恒之教授 & 哲学 野家啓一教授

“東北地方太平洋沖地震”に直面して 改めて言葉の力について考えた

書物のある世界



本を持っているのを見つかけられると本を燃やされ、人は犯罪者として抹殺されてしまうという未来社会を描いたアメリカの小説がある（邦訳『華氏451度』）。小説の主人公は、ある日突然、書物への関心を自覚めさせ、焚書役人の職をなげうち、命がけでの逃亡を図る。
『東北地方太平洋沖地震』（東日本大震災の被災直後から貞観津波や慶長津波に書かれたもの）の伝えられたものなどが話題になったことは、この小説に「脈通じることなのかもしれない。改めて、記録されたもの、伝承されたものの存在、その価値が問い直されている。

3つのシリーズ特集

東北大学文学部の歴代研究者メモリアル 6

1936-1941年、哲学とドイツ文学講座を担当した

カール・レーヴィット

15

文学部の研究紹介 6

歴史科学 柳原敏昭 教授

19

文学部ゆかりの宝もの 6

多彩な江戸資料も所蔵する

狩野文庫

『中世日本の周縁と東アジア』の
成果から、さらに豊穡な“地域史”へ

2

文学部へ行く 6

文学部のニュース&インフォメーション

2011年5月6日、新しい年度が始まりました

TOPICS

創立100周年を迎えた東北大学附属図書館へ行く

図書館・書店との対話 6

12

東北大学生協川内南キャンパス文系書籍店との対話

“東北地方太平洋沖地震”の中で、書籍の生命を見ていた

26

東北大学文学部・文学研究科
阿部恒之教授（心理学）



東北大学理事・附属図書館長
野家啓一教授（哲学）



2011年3月11日14時26分、震度9.0という未曾有の大地震が襲い、青森県から茨城県まで南北500km・東西200kmに及ぶ太平洋沿岸部で、測り知れない被害をもたらしました。

斜面を上った津波の高さは、岩手県宮古市の姉吉地区で38.9m、小堀内で37.9m、和野地区で35.2mを記録。一般的な常識の範囲では、波が集まって巨大な力になるV字型の湾口部や河口部での津波の危険は認識されていたものの、平坦な海岸部での危険はほとんど認識の外にあったと言えるでしょう。そのような思い込みを叩きのめして津波は海岸部全域に押し寄せ、津波警報から約30～45分という短時間の間に、海と共存してきた多くのまちを瓦礫に変えてしまったのです。

震災以後の経過の中で目にしたり耳にしたものは、一方では、気の遠くなるような被災地の広さと被害の大きさ、それに比べての政治的意志決定のシステム不全と遅延、支援金・義援金の遅延等のために海岸部の被災地で復旧・復興が遅々として進まない姿であり、他方では、日本中・世界中から寄せられた救援資金や救援要員など、涙が出るような支援の広がりでした。

この間、東北大学では「防災科学研究拠点」（拠点長：平川新東北アジア研究センター長）を中心に、東北大学の自然科学と人文社会科学の領域を超えた英知を結集。地震と津波の原因・構造、被害の実態と規模、復旧・復興の道、今後の防災への取り組み等についての調査・検証・研究を行うプロジェクトを結成。4月13日（5ページ参照）、6月10日（7ページ参照）と報告会を開き、途中経過を発表しています。

このような中で、「言葉」や「精神」や「振る舞い」といった人間の内面を研究対象とする文学研究から、どんな発言ができるのでしょうか、どんな発言をすべきなのでしょう。か。「できること」と「できないこと」、「やらなければならないこと」と「やれること」と「やってはいけないこと」などの区別を、どのように厳密化していけばよいのでしょうか。被災格差というものとは厳然としてあるでしょう。しかし大事なことは、被災体験の違いに立脚しながら、それぞれの場所にこだわって考え抜くことでしょう。

上記プロジェクトのメンバーである阿部恒之教授と、東北大学からの学術情報発信や広報を任務とする野家啓一教授が語り合いました。

特別対談 “東北地方太平洋沖地震”に直面して 改めて言葉の力について考えた

Part.1

一人一人の 3・11体験について

阿部 当日、私は研究室にいました。宮城県沖地震の教訓から本棚を支える梁を天井に打ち込んであったので本棚は倒れませんでした。しかし、世の中の被災状況が全く分からず、それほどひどい状況だとは思っていませんでした。のんきに本が散乱した様子を撮影したり、亀裂が入った壁や道路などの小さな被害を撮影したりしていました。珍しいことがあるとカメラで記録するというのが癖なんです。

停電で仕事にならないので帰宅することにし、福島から通っている辻本昌弘准教授が帰れなくなってしまうために、私のいる長町の大学宿舎に泊まっていたのだと歩きだしました。川内キャンパスから大橋へと向う道路は信号が消えていて、帰宅しようとする車の長蛇の列ができ、その横を大学の人間が列をなして歩いていくという状態です。そこにまたまた雪が降ってきて、その雪がきれいだったので隅櫓や五色沼を撮影したりしながら、考えていたのは、辻本先生の夕飯のことでした。確かツナ缶があったはずだが……などと計算しながら、

知り合いの寿司屋をのぞいてみたら、「冷蔵庫が止まってしまつてどうせダメになるから食べて行つてくれ」という話。運よく夕食を済ませることができました。

2時間くらいかかったでしょうか、宿舎についてみると、建物が傾いていて危険なので避難せよという指示。避難所に行つてみたのですが、シーンと静まり返つていました。その状況に耐えられなくて、「傾いているといつても目に見えて傾いているわけじゃないし、宿舎には酒だけはたっぷりあるからツナを肴に飲んで寝ましょう」と宿舎に戻りました。充電型パソコンでテレビを見ることができました。津波の被害映像が繰り返し放送されていたはずなのに、私は、仙台市街と家族が住んでいる埼玉のことはかり気にしていません。

野家 私は、東京の会議に出席していて東大図書館にいました。かなり大きな揺れだったので全員で外に避難し、余震が続くものですから会議は中止になりました。交通機関は途絶えてしまい、ホテルも取れないので、しばらく東大図書館の館長室でテレビ報道を見ている状態。名取平野や仙台空港に津波が押し寄せるシーンなどが繰り返し放送される中で、自宅のある若林区の名前が度々聞こえます。自宅にも大学にも全く電話が繋がらず、気が気でないままテレビを見つめているしかありませんでした。東大の近くにある修学旅行用の旅館で、7人部屋に9人泊まるということで部屋がとれて移動。テレビを見ながら家族や友人の無事を祈つて一晩を明かしました。

その後、交通手段がなくて3日間は同僚

が見つけてくれたホテルを転々とし、山形空港行きの増便を利用し、山形からバスで仙台へと戻り（山形からの一般道での山越えは2時間程度でした）、真つすぐ大学本部へ行き、災害対策本部の会議に加わつたのは14日のことでした。災害本部は即日に立ち上げられていたのです。この間、妻は、余震を避けて近くの小学校に避難。書斎などはメチャメチャでしたが、東部道路の西側の地区にあった自宅は無事でした。

研究室の書棚はボルトで壁に固定していたため、棚は倒れませんでした。ボルトが抜けて傾き、本は全部飛び出し、扉が開かないという状態。何度か体当たりをして隙間をつくり、パソコンまで辿り着くのにないぶ体力を使いました。東北大学の図書館も100万冊近くの書籍が落下し、貴重図書もかなり被害を受けていました。

阿部 私の研究室のある建物は耐震基準法以降の建物らしく、建屋にはほとんど被害はなくて研究室に出入りできました。それで、辻本先生と二人で泊まりこんで学生の安否確認を始めました。学生もほかに行くところがないので研究室に集まつてきました。それで役割分担をして安否確認を手伝つてもらいました。ふだん、頼りないと思つていた学生が活躍し、「メーリングリストで確認したら3人分かりました」などと言うので、こんなに頼もしい人間だったかと思直しました。これは収穫でした。避難所をまわつて未確認の学生を見つけたときは、互いに駆け寄つて抱き合つてしまいました。ふだんだったら絶対にしらないことです。お腹をすかせて集まってくる学生にアルコー

ルランプで湯を沸かしてカップラーメンを作つてあげるのが、このときの最大の楽しみでした。こうして震災によって学生との距離感が変わりました。今までは学生の前では一人称として「私」しか使つたことがなかったのに、ついつい「俺」と言つてしまうこともありました。もちろん今は修正しましたが、そんなこんなで、14日には研究室全員の無事が確認できました。

野家 東北大学の図書館では、地下には狩野文庫という貴重書があるのですが、和本は意外と災害には強いことが分かりました。洋装の本は堅牢だけれども破損がひどいのに対して、和綴じの本は帙に保護されてソフトランディングというのか、落下しても

ほとんど破損しませんでした。5月の大雨の時も、地下の書庫の壁の割れ目から漏水して狩野文庫の一部も被災したのですが、和紙の本は水に濡れても乾かせば元に戻るの、案外強いようです。

東北大学では、震災直後、すぐに環境科学研究科の学生を中心にして「HARU」という名前でボランティア活動が始まりました。最初は9人だった団体が、今では登録者が1000人を超え、県内各地で活動をしているようです。交代で30〜40人が図書館の片付けにも来てくれて、ずいぶん助けられました。それも、学生の意外な面が見えた一例でしょうね。



阿部恒之教授が撮影した仙台市内の写真

Part.2

行列が乱れない ということ、 略奪も少ない ということ

野家 自宅のある若林区元茶畑という地区は、昔からの家が割りと残っていて、昭和30年代の子供の頃は、映画の『ALWAYS 三丁目の夕日』(西岸良平のマンガ『三丁目の夕日』)のように隣近所のつきあいがかなり濃密なところでした。夕飯を近くの家で食べさせてもらったり、隣の家でテレビを見せてもらったりというのはしょっちゅうでした。しかし、小学生の時代に核家族化が始まり、新しい人がどんどん入ってくるようになり、道で会っても目礼する程度に変わりました。

ところが妻の話によると、地震直後から隣近所で声を掛け合って毛布やストーブなどの貸し借りをするなど、昔の隣近所の付き合いが復活したような雰囲気だったというのです。私もコンビニに並んだ時には、見ず知らずの人が声をかけてくれて、あつちの店が開いたとか、何が買えるとかの情報を伝えてくれる。昔の隣近所の付き合いがタイムマシンに乗ったように復活したのには、驚きました。戦中の町内会や隣組という組織は相互監視につながりましたが、このようにお互いが被害者だと

いう同族意識がうまく働けば、相互扶助のネットワークを形づくれるのかなという印象を強く感じました。

阿部先生は、東北大学防災科学研究拠点を中心に行っている調査・研究プロジェクトに参加し、4・13、6・10の「東日本大震災後報告会」で「被災者のマナー」について報告をしています。このような事例は、いろいろと見聞きしているのではありませんか。

阿部 4・13の「被災者のマナー 被災後の生活と治安」では、私は自分で見たこと、体験したことを写真もまじえながら報告しました。たとえば、ダイエーの前から定禅寺通まで東二番町通に長い列ができ、整然と並んで買物をしている人々の姿や、水は出た、しかしガスは出ない、だから風呂に入れないという状況の時に水のシャンプーを100円で提供していた理髪店などです。あるいは、地下鉄に乗り合わせたような時に「お宅、どうでした」などと声をかけあうといった例もありました。これなどは、今までは都会人として距離をとることがマナーだと思われていたのが、その抑えが解除されて、普通に声をかけてもいいんだという状況が生じたのだという印象です。

また、6・10の「被災者のマナー2 被災時の混乱と助け合い」では、新聞・雑誌・テレビ報道、日記などの記録を検索・収集して、事例を報告しました。震災直後にお店がものすごく安く売ってくれたとか、全く知らない人から食べ物を買ってもらったり、車で送って行つてあげるといわれたりしたとか、普段では考えられないような助け

合い行動が起こっているといった例が数多くあります。

野家 一方で、私はタクシートの運転手さんに聞いた話ですが、沿岸部では、人がいなくなった家から物を勝手に持ち出したり、流れ着いた冷蔵庫を開けて中の食料を取ったり、ひっくり返った車からタイヤが盗まれたりする例があったという話を聞きました。略奪というのは違うのでしょうか、窃盗に近いようなことは起こっていたのに、マスコミはそれを報道しなかったということもあつたのではないのでしょうか。

阿部 たしかに略奪に近いことは起こっていました。私も、壊されたガラスの上にベニヤ板を打ち付けたコンビニエンスストアなどを見ました。ガラスが割られているとか、物が無くなっているのを見たという新聞記者の話も聞きました。確定的な証拠がなくて書かなかつたというのです。

たとえば私たちは、アメリカのハリケーンカトリナ災害の時に、悲惨な略奪現場の報道を見せられ、海外ではこんなにひどいのかと感じました。しかし、レベルの差はあるかもしれないけれど、海外はメチャクチャ、日本だけは秩序だっているし完全に二分できるものではないかもしれないぞとは思っています。誰が略奪したり窃盗したりするのか。震災をチャンスに外から入りこんでくる常習者たちなのか、コミュニティでも出来心のようなことは起こりうるのか……厳密に考えていきたい項目の一つだと思っています。

野家 私は、5月10日に行なった鈴木厚人教授(前東北大学ニュートリノ科学研究センター

長・高エネルギー加速研究機構機構長との対談(東北大学ホームページにアップ)の中で、「海外の報道では、震災に際して略奪が起ころなかったことが驚きとともに紹介されました。それはある意味では国民性といえるでしょう。それと併せて今回の災害後に感じたのは、日本では外国よりも土着的なコミュニティ・ネットワークが強いということ、核家族化が進行していますが、互いに隣近所と助け合うネットワークがまだ日本に生きていたということ」と語りました。

阿部 海外からの称賛の例は、私も、NHK BSで放送された『Cool Japan 発掘! かわいいニッポン』という番組で、海外の



阿部恒之教授 Abe Tsuneyuki

新潟県生まれ。1985年、東北大学文学部(哲学科心理学専攻)卒業、(株)資生堂入社。2001年、ビューティーサイエンス研究所主任研究員として、東北大学文学研究科博士後期課程(行動科学専攻・心理学分野)修了。2005年より東北大学在籍となり、現職へ。『ストレスの仕組みと積極的対応』(1991年)、『化粧心理学』(1993年)、『化粧行動の社会心理学』(2001年)、『対人心理学の視点』(2002年)、『ストレスと化粧の社会心理心理学』(2009年第4刷)等、執筆・共同編集・著書多数。



4月13日、東日本大震災1ヵ月後緊急報告会

■東日本大震災1ヵ月後緊急報告会の報告テーマ

地震メカニズム(東北地方太平洋沖地震および余震)

- 2011年東北地方太平洋沖地震(M9.0)について
～これまでにわかったこと、まだわからないこと～
- 地学的なアプローチ

地震災害、建物・地盤・インフラ災害、インフラ・交通被害

- 地震動と建物等の被害
- 3.11巨大地震による仙台付近の基石転倒率調査結果
- 福島県須賀川市藤沼決壊について
- 宮城県北部の地震地盤災害について
- 宮城県南部および内陸丘陵造成地の地震地盤災害について
- 交通ネットワークの被害と復旧の状況
- 東日本大震災に関するウェブ情報のアーカイブとその解析
- 3.11大震災と歴史遺産の被害(平川新教授)
- いわき市における陥没事故、地鳴り現象と石炭採掘の関連性

津波メカニズム、津波災害の実態

- 海底観測が捉えた東北地方太平洋沖地震の津波波源域における海底隆起
- 大津波の実態調査と教訓の整理に向けて
- 衛星画像から判明した東北地方太平洋沖地震津波の被害と復興に向けての取り組み
- 津波による海岸堤防の被害
- 貞観地震津波と今回との比較

災害保健医療

- 災害時の緊急保健医療対応—何ができ何ができなかったか?—

災害情報、認知・風評被害

- 被災者のマナー 被災後の生活と治安(阿部恒之教授)

復旧復興のグランドデザイン

- 復興まちづくりのあり方
- せんだいスクール・オブ・デザインによる特別プログラム「復興へのリデザイン」
- 社会経済的被害と地域再生



東北大学には、地震や津波を理学的・工学的に研究する地震噴火予知観測研究センター(理学研究科)、災害制御研究センター(工学研究科)、歴史的・社会科学の視点も加えて幅広く研究する防災科学研究拠点(事務局:東北アジア研究センター)などがあります。

この防災科学研究拠点は、(従来型の地震予知・耐震化等のハード研究をブレイクスルーし、「人間と社会を対象にした新段階の防災研究を促進する」ことを標榜。(特に、地域社会の防災・減災にとって緊急性の高い災害

情報の先端処理と被災者の救助・ケアの高度化に関する研究を中心に、東北大学の文系・理系の学術ポテンシャルを活用して実践的防災学の研究を協力に推進する)ことを目指しています。

東日本大震災のほぼ1ヵ月後の2011年4月13日、この防災科学研究拠点が主催者の一人となり、「東日本大震災1ヵ月後緊急報告会」を開催(会場:トラスティティカンファレンス・仙台)。

調査、検証等により把握した震災の実態をさまざまな視点から報告しました。この中で、**文学研究科・文学部の阿部恒之教授(心理学講座)**は「被災者のマナー 被災後の生活と治安」により、被災者および被災地の秩序だった行動や助け合う行動が海外から注目され、称賛されたことにふれながら、穏やかな避難生活を築き、二次被害の最小化をもたらししていることなどを報告。東北アジア研究センターの平川新教授(日本近世政治経済史専攻)は「3・11大震災と歴史遺産の被害」により、貞

観11年(869年)に陸奥の国を襲った「貞観津波」や、慶長16年(1611年)に奥州を襲った「慶長津波」にふれ、江戸時代には歴史と経験に学んだ町づくりと街道づくりが行われた可能性があることなどを示唆しました。平川教授のこの指摘は、災害制御研究センター・菅原大助教授・今村文彦教授、理学研究科・箕浦幸治教授による報告「貞観地震津波と今回との比較」にも反映され、貞観地震津波と東日本大震災津波との津波の規模や被害規模の比較が行われています。

人が、日本人のこのような姿に「コミュニティ」という言葉を使って称賛しているのを見ました。

これまで、日本人は何があっても列を作るとか言われて海外から揶揄されてきました。『定刻発車』三戸祐子／新潮文庫という本は、鉄道の国際会議などで日本の鉄道人は「列車が遅れると社員を死刑にするのか」といわれる話を紹介しながら、毎日160万人の人が乗り降りする新宿駅、一つのホームから毎日217本の列車が走る東京駅の東北・上越新幹線等の1分と違わない定時運行の様子に触れ、それは乗客の協力によってできあがっているといった内容をまとめています。これは、日本人の過剰に規律を守るといふ癖であり、悪い方に行けば相互監視社会の、横並び式の、KY(空気を読めない人間)という言葉に代表されるように空気を乱さないことを最優先する社会になってしまいかもしません。ところが、この番組に集まっていた海外のジャーナリストたちは、それを笑っていた自分たちが間違っていた、ふだんの日本人の姿の延長線上に秩序だった災害後のあるべき世界があるといったニュアンスで話していたのです。

罪の意識とか、恥の意識とか……。もしかすると、行列を作るといった私たちの秩序だった避難行動というのは、普段しばられている世間の目などと地続きになっていて、それが良い面で見られたことなのかもしれない。流れ着いた冷蔵庫であってもそれを開けるのははしたないと思う人が1割いる社会と、いない社

会とでは、人の気持ちの現われ方が違うかもしれない……。私は今、そんなことを考えています。

野家 『災害がほんとうに襲った時』(中井久夫著／みすず書房)という本は、阪神淡路大震災に直面した精神科医が記したものです。が、「エリアス・カネッティの『群衆と権力』によれば、人間集団はある臨界点を越えると突然『液状化』して、『群衆』と化し、個人ではまったく考えられないような掠奪、暴行、放火などを行うという。／『神戸ではそれが見られなかった』ということは日露戦争以後はじめて日本が世界からほめられた事態であった。私には生まれてはじめての事態である。』という記述が見られます。私にも同じような実感があります。

阿部 私が準備してきた本の中では『災害ユートピア』(レベッカ・シルニット／亜紀書房)が、同様のことをまとめています。サンフランシスコ地震(1906年)、メキシコシティ地震(1985年)、ハリケーンカトリナ(2005年)などのパニック時に、人はどのように振る舞ったかを詳細にまとめたものですが、災害時には、略奪現場がある場所の脇に、ボツンとユートピアのようなコミュニティが確実に発生していると書いています。アメリカでも、日本で見られる助け合いのコミュニティのようなものがあると書いています。

実は日本人の行列も、いつから、そのように整然と並ぶようになったのかはよく分かっていません。戦後まもなくの時代には、復員列車や市などでは、かなり無秩序でひどいことも行われていたという記録を見た

ことがあります。私が子どもの頃、東京に行ったときに、山手線に整然と列をつくって並んでいるのにビックリしました。田舎では、その必要のある機会や場所がないため列なんてつくっていませんでしたから、私と祖父は知らずに列を無視して乗り込みました。誰にも文句は言われませんでした。が、そのうちに「じいちゃん、これは具合が悪いんじゃないの?」って、並ぶようになりまして。もしかすると、列をつくるというのは都会から始まったもので、東北の、日本の古き良き心を源泉としているといったものではないかもしれない、という気がします。

野家 旧ソ連には、何の列か分からなくても列があれば必ず並ぶというジョークがあるそうです。列をつくるというのは、必ずしも日本だけではないんじゃないかという気がしますね。日本では、いつ、なぜ、行列をつくるようになったのか。社会史や風俗史、歴史社会学などの知見を基にして研究されるべきテーマなのかもしれませんね。

阿部 行列をつくるような行動が二次災害を通減させることに役立ち、振る舞いの美しさという点では筋が通っていることは確かだとも思います。私は、4・13の「被災者のマナー被災後の生活と治安」を(災害後の暮らしの安全を守るためには、混乱行動を生じる条件・生じない条件を明らかにし、その「分水嶺」を見極める必要がある)と締め括りました。自分のこれからの研究テーマの一つとしていきたいと考えています。

野家 文献に残っていない人間の行動様式のようなものを分析するというのは、民俗学のテーマになりうるものかもしれない

せんね。柳田国男は『先祖の話』という本の中で、ある行き倒れ人が最後まで風呂敷に包んで持っていたのは親の位牌だったという例を取り上げ、日本人の先祖に対する崇敬の念を分析していました。人間が生きていく上で、自分のアイデンティティというか、自分がどういう来歴で、どういう歴史の中に属しているかということはかなり大事なファクターになります。だから、被災した人々がこれまで自分を支えてきたアイデンティティをもう一度、ゼロからとは言わないまでも、かなり根本的なところから紡ぎ直さなければならぬところがある、それがこれからの大きなテーマになるのではないかと私も思っています。



野家啓一教授 Noe Keiichi

宮城県生まれ。1971年、東北大学理学部(物理学科)卒業。東京大学理学研究科科学史・科学基礎論修士・博士課程修了後、南山大学助手・講師、プリンストン大学客員研究員を経て、1981年東北大学へ。1991年より現職。2008年より東北大学理事(広報・萩友会・学術情報担当、図書館長兼務)。「言語行為の現象学」(1993年)、「科学の解釈学」(1993年)、「科学の哲学」(2004年)、「歴史を哲学する」(2007年)、「パラダイムとは何か—クーンの科学史革命—」(2008年)等、著書・共著書・訳書多数。

6月10日、東日本大震災3ヵ月後報告会

■東日本大震災3ヵ月後報告会の報告テーマ

セッション1. 津波による被災の実態とメカニズム

- 津波発生メカニズム
ー津波浸水域を再現出来る波源モデルの検討ー
- 東北地方を襲った津波の流況と建物被害
- 海岸堤防の被災メカニズム
- 海岸林の被害と減勢効果
- 仙台平野に襲来した過去3回の大津波による堆積物の分布と津波遡上距離について

セッション2. 地震・地震動と振動被害

- 2011年東北地方太平洋沖地震はどのような地震だったのか？
- 本震及び余震の揺れの分布
- 地震動と建物被害の関係
- 震動域における被災建物の分布
- 地盤工学に関する課題

セッション3. 地域社会を取り巻く諸課題：保健医療・生活文化・情報・復興

- 災害保健医療支援室の活動から見た救援期の支援ニーズの推移
- ロボットによる震災対応
- 歴史遺産レスキューの三ヶ月
ー被災地での活動と所蔵者・地域ー（佐藤大介教授）
- 被災者のマナー 2被災時の混乱と助け合い（阿部恒之教授）
- 沿岸部でのリスク認識と対応についての調査
- 中越地震等の復興と東日本大震災への教訓
- 復興現場へのアプローチ



東北大学防災科学研究拠点による東日本大震災に関する調査、検証、研究活動は、6月10日、「東日本大震災3ヵ月後報告会」となって現れました（会場：仙台国際センター）。

△復興に向けて見えてきた課題▽と題し、4月13日の緊急報告会からさらに2ヵ月を経て、見えてきたさまざまな分野における課題を共有化し、被災地の復興に生かすことを標榜。△地震・津波のメカニズム、被害の実態、復興のデザイン▽をキーワードに、3

つのセッションから、17の報告が行われました。

文学部・文学研究科関連では、阿部恒之教授が「被災者のマナー2被災時の混乱と助け合い」、東北アジア研究センターの佐藤大介教授（文学研究科修了）が「歴史遺産レスキューの三ヶ月ー被災地での活動と所蔵者・地域ー」を報告。阿部教授は、新聞のデータベースと個人の日記という実際の記録に基づいて分析を深め、被災後

にどんな振る舞い（行列、生活物資の流通、自粛、風評、デマ、犯罪行動、略奪、助け合い等）が見られたかを、阪神淡路大震災時との比較も行いながら検証。デビット・ロモ（アメリカ）の「災害と心のケア」を借用し、被災者の回復プロセスが英雄期・ハネムーン期・幻滅期・再建期と分けられること、3ヵ月たった現在点はハネムーン期から幻滅期へと移り変わる時期にあり、一層の助け合い、きめ細かな支援が必要なことなどを詳しく報告しました。



書かれたものと、
書くこと

阿部 ところで、私は、6・10の「被災者の

マナー2被災時の混乱と助け合い」では、岩手県で行われている「復興の狼煙」プロジェクト(<http://fukkou-noroshi.jp>)を紹介しました。これは復興に向けて歩み始めた人たちの姿を写したポスターを販売し、その売り上げを現地に寄付するプロジェクトです。瓦礫を背にしてすくと立つ現地の人の顔。それにふさわしいコピー。それが一体となった力強いメッセージに衝撃を受けました。ぜひ、多くの方々にご覧いただきたいと思っています。最近、この写真のカメラマン、馬場龍一郎さんは東北大学の文学部出身だとかがい、驚きを新たにしました。

震災の時、正直言って言葉の力よりもお金の方だと思います。しかし、それでもなお表現・言葉の力はすごい。改めて感じた次第です。

野家 私の場合、それは和合亮一さんという福島在住詩人の『詩の礫』(徳間書店や、仙台在住の作家・佐伯一麦さんの『震災日記』という新聞連載(読売新聞)でした。和合さんがツイッターで発表していた詩をまとめたものですが、始めたころには170人くら

いだったフォロワーが今では1万4000人を超えているようです。ツイッターならではのリアリティというのか、臨場性が見ていた人をどれほど刺激し、どれほどのエネルギーとスピードで広がっていったか、本当に納得できるものでした。被災共同体の無意識を表現し、潜在的な欲求を言葉にし、人を力づけるシャーマンの役割を果たしているように思いました。言葉の力の大きさ、詩人や文学者の役割を見直した気持ちになりました。

阿部 言葉の力ということであれば、地震や津波についての歴史的な記録の問題も大きな議論になりました。

4・13の報告会では、東北アジア研究センター長・平川新教授の「3・11大震災と歴史遺産の被害」や工学研究科災害制御研究センター・菅原大助教授・今村文彦教授、理学研究科・箕浦教授の「貞観地震津波と今回との比較」という報告(いずれも5ページ参照)で、仙台平野を襲った貞観地震津波(869年)や慶長津波(1611年)のことにふれられました。実は、この貞観地震津波や慶長津波については、たとえば箕浦教授は東北大学の機関誌『まなびの杜』の2001年夏号に、「津波災害は繰り返す」という論文を発表していました(9ページ参照)。そのような歴史的な指摘が力になっていなかったのではないか、言葉での伝承でよいのかという議論です。

野家 因縁話めいてしましますが、書齋に散乱した自宅の本の一番上にあったのが、なんと明治三陸地震津波(1896年)、昭和三陸地震津波(1933年)などの歴史と

伝承をまとめた『三陸海岸大津波』(吉村昭/文春文庫)でした。震災についてまとめられた歴史や伝承について、基本から考えろと言われているようでした。

貞観地震津波については、たとえば「仙台平野の歴史津波」(1995年)を著した飯沼勇義さんのように、箕浦教授以外にも以前から警告を発していた人がいました。しかし、1千年前の地震や津波を現実感をもって受け取り、今の防災の具体的な行動に反映させるということはかなり難しいことだと思っています。

私の子供の頃、チリ地震津波というものがあり、自分が被災したわけではありませんが、海岸沿いが大変なことになったということは新聞の大きな写真や見出しなどで記憶に残っています。しかし、それを具体的な防災に生かすとなると、ほとんど自分のことではないというのが本当のところでした。この震災も喉元すざれば熱さを忘れるで、直接の被災地を除けば、今となれば3・11直後のリアリティは失われ、ほとんど日常生活の中に埋没しています。災害の記憶をそのままずっと保持していたらとても生きてはいられない。忘却することが人間の安全装置だということもあるのです。それはしょうがないと思います。

しかし、自治体の具体的な防災対策となれば別話でしょう。行政に対して、どれだけ精緻な記録にまとめて残り、それを土台に議論させ、対策を立てさせるかは、徹底して追求されるべきことでしょう。

阿部 記録は理性的に判断して動くべき行政に受け渡し、私たちは感情記憶をどのよ

うに子供たちに伝えていくか、ということですね。今村教授たちは、津波がどこまで押し寄せたかなど、地震と津波について詳細な記録を残すために活動しています。私も、人々の振る舞いの記録をアーカイブという形で残そうと思っています。「残す」ということに、私たちの役割の一つがあると思っています。

心理学や行動経済学で話題になっていることの一つですが、「決定は理性ではなく、感情が強く作用する」ということがいわれます。津波の危険性についての歴史的な記述は理性的な危険性であり、感情的な危険性は磨耗してしまっているということではないでしょうか。たとえば「失敗学」の畑村洋太郎工学院大学教授の『危険学』(2011年5月)によれば、「こより下に家を建てるな」などと書かれた津波記念碑は三陸海岸のアチコチにあるそうです(たとえば宮古市姉吉地区の石碑原文は「高き住居は児孫に和楽 想へ惨禍の大津波 此処より下に家を建てるな」)。しかし、時が経つにつれて民家・商業施設などが建てられるようになり、またしても津波に襲われてしまったと書かれています。祖先が残してくれた津波の教訓、感情経験が磨耗してしまった結果なのではないでしょうか。

では、次に似たようなことが起こったとき、もうちょっと違った行動になるでしょうか。この震災を経験した私たちは、海の近くは危険だとか、地震が起きたら高台に逃げろとかの対策を恐怖をもって実行できるでしょう。しかし、孫の世代になれば、その恐怖は失われ、感情の伝達ができなく

地震と津波に関する多彩な出版物、そして多様な発言

■地震、津波に関する主な出版物

(太字は、東北大学関係者の著作ないし東北大学出版会発行)

<文学・評論等>

- 小泉八雲著『生ける神』(安政の東海地震・南海地震)
高村忠範文・絵『津波!!命を救った稲むらの火』(安政の東海地震・南海地震)
津波：汐文社 2005年)
- 芥川龍之介著『侏儒の言葉 或自警団員の言葉』(関東大震災関連)
寺田寅彦著『天災と国防』『静岡地震被害見聞記』『震災日記』(いずれも『寺田寅彦全録』所収。『震災日記』が関東大震災関連：岩波書店 1992年)
菊池寛著『災後雑感』(関東大震災関連：中央公論社 1923年)
田中貢太郎著『田中貢太郎見聞録』(『日本天変地異記』で3年半に1回地震が起きていることを記録：中央公論社 1982年)
吉村昭著『三陸海岸大津波』(明治29年・昭和8年の三陸津波：文春文庫 2004年)
吉村昭著『関東大震災』(関東大震災関連：文春文庫 2004年)
飯沼勇義著(仙台市在住)『仙台平野の歴史津波』(宝文堂 1995年)
飯沼勇義著『3・11 その日を忘れない』(鳥影社 2011年)
- 山下文男(大船渡市在住)『津波でんでんこ 近代日本の津波史』(新日本出版社 2008年)
山下文男著『君子未然に防ぐ 地震予知の先駆者・今村明恒の生涯』(東北大学出版会 2002年)
山下文男著『津波の恐怖 三陸津波伝承録』(東北大学出版会 2005年)
田中康夫著『神戸震災日記』(阪神淡路大震災：新潮文庫 1997年)
広瀬弘忠著『人はなぜ逃げおくれるのか』(集英社 2004年)
中井久夫著『災害がほんとうに襲った時』(阪神淡路大震災：みすず書房 2011年)
ヴォルテール『カンディード』(1755年・リスボン地震関連：岩波文庫 2005年)
アダム・スミス『道徳感情論』第三部注16(1755年・リスボン地震関連：岩波文庫 2003年)
カント『地震の原因(他五編)』(1755年・リスボン地震関連：内田老鶴園 2002年)
ウィリアム・ジェームズ論文『地震の心理的效果について』(1906年・サンフランシスコ地震関連)
石丸正(文学部卒)訳(ビヴァリー・ラファエル著)『災害の襲うとき』(みすず書房 1995年)
レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』(亜紀書房 2010年)

<地震・津波研究書等>

- 安芸敬一・P.G.Ricard『QUANTATIVE SEISMOLOGY』(邦題『地震学—定量的アプローチ』：古今書院 2004年)
宇佐美龍夫著『日本被害地震総覧』(東京大学出版会 1981年)
宇佐美龍夫著『新編日本被害地震総覧』(東京大学出版会 1987年)
東京大学地震研究所編『新収日本地震史料』(1981-1994)
宇津徳治『地震学』(共立出版 1977年)
宇津徳治『地震活動総説』(東京大学出版会 1999年)
伊藤和明著『地震と噴火の日本史』(岩波書店 2002年)
武者金吉編『増訂大日本地震史料 1~3巻』
(文部省震災予防評議会 1941、43年)
武者金吉『日本地震史料』(明石書店 1995年)
活断層研究会編『日本の活断層』(東京大学出版会 1980年)
伯野元彦『被害から学ぶ地震工学』(鹿島出版会 1992年)
今村文彦教授・越村俊一准教授(共に工学研究科附属災害制御研究センター)他著『津波から生き残る』(土木学会 2009年)
今村文彦教授・越村俊一准教授他編『津波の事典』(朝倉書店 2007年)
寒川旭(理学研究科修了)著『揺れる大地 日本列島の地震史』(同朋舎出版 1997年)
寒川旭著『地震考古学』(中央公論社 1992年)
寒川旭著『地震の日本史』(中央公論新社 2007年)
寒川旭著『秀吉を襲った大地震』(平凡社 2010年)
中田高(工学研究科修了)『日本の活断層地図(シリーズ)』(人文社 2005年)
NEWTON 2011年6月号『大特集 原発と大地震』(ニュートンプレス 2011年)



東日本大震災以後、地震、津波に関連する出版物としては、たとえば1854年の安政の東海地震・南海地震を題材とした小泉八雲著『生ける神』(『津波!!命を救った稲むらの火』などの絵本になっている)、1896年・1933年の三陸津波を題材にした吉村昭著『三陸海岸大津波』、1923年の関東大震災を題材にした吉村昭著『関東大震災』等、書店で入手でき、東北大学附属図書館・宮城県図書館・仙台市図書館での閲覧可能な出版物が話題になりました。

◆ 東北大学関連では、石丸正氏(文学部卒)の翻訳、今村文彦教授、越村俊一准教授(いずれも工学研究科附属災害

制御研究センター所属)、中田高氏(工学研究科修了)、寒川旭氏(理学研究科修了)らの著作、柴田明徳名誉教授の「歴史の中の地震」と題した論文、東北大学の広報誌「まなびの杜」2001年夏号に「津波災害は繰り返す」と題して発表された箕浦幸治教授(理学研究科)の論文などが注目されました。箕浦教授は868年の貞観津波にふれ、「歴史上の事件と同様、津波の災害も繰り返すのです」と記していたのです。また、たとえば「新潮45」2011年6月号の「震災後をどう生きるか」特

集の中での木田元氏(文学部卒・文学研究科修了)の「技術文明の自壊」、山折哲雄氏(文学部卒・文学研究科修了)の「共死を想え」などの発言が目立ちました。1978年(宮城県沖地震があった年)に文学部の招聘教授として在任し、1997年に東北大学初の名誉博士となったDonald Keene博士が、被災地との連携・支援の気持ちから日本への帰化・永住を決意したというニュースも心動かされるものでした。

なっているかもしれません。個人の感情記憶だけを受け継ぐことはむずかしいので、どうすればよいか。それがこれからのテーマなのではないでしょうか。

野家 単に建物があれば街になるというわけではなく、それまでの歴史とか人間の関わり、ネットワークのようなものが蓄積されて初めて町や村になります。それは個人の場合も同じでしょう。自分を支えてきた、ある種の物語を、この震災を機にもう一度語り直す必要が出てきているのでしょね。物語そのものを語り直したり、紡ぎ直したり……。そういうお手伝いなら、私たちが属する文学部の学問でもできるのではないかと思います。歴史学は街の歴史を復元するとか、心理学や精神医学は個人の記憶を掘り起こすとか……

阿部 その時、写真は絶対に大事な資料だと思います。

私は、震災直前の2月に、タイの留学生とともに、2004年12月のインドネシア・スマトラ島沖地震による津波被害にあったタイのプーケットで面接調査を行いました。「防災準備が必要か」と問うと「はい」なのに、「次の大津波に備えて実際に準備しているか」には「いいえ」です。この、気持ちと頭と実際の行動の間の違いは何なのだろうか。心理的抑圧なのだろうか。心理的抑圧がはつきり解明できたら防災準備行動が向上するのだろうか……といった視点から研究をしていたのです。その調査から見えてきたことは、特に日本人に顕著なのですが、家族の中に老人や子供などの守るべき人がいるとか、近隣との交流が深いという人たちが

は、自分の家での防災準備行動に熱心だということでした。その地域で一生生きていくという人たちは、棚に突っ張り棒をするなどの準備をしている傾向が見られました。人は、自分自身のためというよりも、他人のために行動するのです。この調査の時に入手した津波直後の写真集を見ると三陸の津波被害とそっくりです。しかし、調査の時に撮影した6年後のプーケットの写真はまったく違います。エメラルドグリーンの海で観光客がパラセーリングを楽しんでいます。私にとって、この写真は宝物です。東北の海も、きつと数年で回復するという希望が湧いてきます。

野家 私の自宅が若林区ということで安否確認の電話がたくさん入ったようなのですが、しばらくの期間は固定電話も携帯も通じませんでした。しかしいつの間にかツイッターを通じて、「野家は無事だ」という



阿部教授がタイのプーケットで撮影した津波からの復興後の写真

ことが友人たちに伝わっていました。今回、ツイッターやフェイスブックのようなソーシャルメディアが力を発揮することがわかりました。地域のコミュニティ、隣組のようなネットワークと、海外にまで発信できるツイッターのようなネットワークを、うまくつなぐことができれば、連帯や協力のあり方にも変化が生まれるかもしれません。隣近所で助け合うような人にはツイッターは使えない、ツイッターを使える人は隣近所のコミュニティには参加しないといった傾向があります。それをどうつないでいくか。うまく変えていければ社会的な力になるのではないのでしょうか。

「復興の狼煙」ポスタープロジェクトのボスターも、プーケットの写真も、東北大学のエクステンションホールや図書館で展示することを企画してみましよう。

Part.4 3.11以後へ向けて、 考えること、 問い直すこと



野家 家の中の跡片付けをしながら、いかに無駄なもの、余計なものを蓄積してきたかと嫌になりました。これも積み重なった本の山の中にあつたのですが、トルストイの『イワンのばか』岩波文庫の中に、「人には

どれほどの土地がいるか」という民話があります。一生懸命土地を耕して暮らしていた人間が、へただひとつ弱るのは、地面の足らないことだ！これで、地面さえ自由になつたら、わしにはだれだってこわいものはない——悪魔だつてこわくないよ！——と言った言葉を悪魔に聞かれ、試されるのです。陽が沈むまでに歩き回った分だけ土地をやるといわれ、たぐさんの土地を得ようと必死に歩きまわった結果、疲労困憊し、悪魔の笑い声を聞きながら倒れてしまいます。主人公の下男は、土を掘り、きっかり頭から足が入るだけの墓穴を掘って、彼をそこに埋めました、というお話です。

原子力発電所の事故をみて、私には、人類と核エネルギーの共存は極めて難しいという印象を受けました。放射能についてはいろいろな噂も飛び交っていますが、それこそ私たちはきちんとした知識を身に付けて対応することが必要でしょう。人類の知恵と技術で核エネルギーをコントロールすることができると。この先、どのような地殻変動があるか科学的に不明な中で、核廃棄物をどのように処理すればよいのか。核エネルギーを必要とするライフスタイルは、このままでよいのか。

これまで私たちが自明のものとして享受してきたライフスタイルに、今回の震災は問いを突き付けているのではないのか。私は、そんなことを感じていました。

(2011年6月22日 東北大学文学研究科 阿部研究室にて)

“地震・津波多発国”日本の主な大地震・津波年表



そんな中でも、2011年3月11日に発生、マグニチュード9.0、青森県から茨城県にわたる太平洋沿岸地域に甚大な被害をもたらした東北地方太平洋沖地震・津波東日本大震災は、未曾有の震度と津波規模を持つものだったのです。

ユーラシアプレート、北アメリカプレート、フィリピンプレート、太平洋プレートの境界にあり、東日本の太平洋沖には日本海溝が南北に走っている日本列島は、インドネシアと並ぶ地震・津波災害多発国だといわれ、「津波」の言葉は「TSUNAMI」として国際的な学術用語にさなっています（「津波でんでんこ近代日本の津波史」等）。「津波」程度以上の震度で、記録が残っている、または地層調査などから特定できる地震・津波は、リストのように日本国土の全域に及び、わずか100年、数十年を隔てただけで起こっています（国立天文台発行「理科年表」、NEWTON 2011年6月号等）。

■日本の主な地震の記録（M7前後以上の震度の地震／日本を中心に、若干の世界の地震を抜す）

1684年 11月29日	白鳳地震(東海・東南海・南海が連動か?)・津波(M8.1/4)	1945年 1月13日	三河地震(M6.8)
1689年 7月13日	貞観地震・津波(M8.3)	1946年 12月21日	昭和南海地震(M8.0)・津波
1887年 8月26日	仁和地震(東南海・南海連動。東海も連動か?)・津波(M8.0~8.5) *10世紀後半の地層に、南海地震の影響か、洪水砂の跡が残る	1948年 6月28日	福井地震(M7.1)
1096年 12月17日	永長地震(東南海まで連動か?)・津波(M8.0~8.5)	1952年 3月 4日	十勝沖地震(M8.2)
1099年 2月22日	康和地震(南海単独)・津波(M8.0~8.3) *13世紀半ばの地層に、東南海地震の影響か、東南海各地に液状化跡が残る	1952年 11月 4日	カムチャッカ地震(M9.0)
1361年 8月 3日	正平地震(東南海・南海が連動)・津波(M8.1/4~8.5)	1957年 3月 9日	アリューシャン地震(M9.1)
1498年 9月20日	明応地震(M8.2~8.4/東南海・南海が連動)・津波	1960年 5月23日	チリ地震(M9.5)・津波
1596年 9月 5日	慶長伏見地震(M7.5)	1963年 10月13日	択捉島沖地震(M8.1)
1605年 2月 3日	慶長地震(M7.9/東南海・南海が連動。東海も連動か?)・津波	1964年 3月27日	アラスカ地震(M9.2)
1611年 12月 2日	慶長地三陸地震(M8.1)・津波	1964年 6月16日	新潟地震(M7.5/“液状化現象”が起こった)
1615年 6月26日	元和江戸地震(M6.1/4~6.3/4)	1968年 4月 1日	日向灘地震(M7.5)
1649年 7月30日	慶安江戸地震(M7.0)	1968年 5月16日	十勝沖地震(M7.9)
1703年 12月31日	元禄関東地震(M7.9~8.2)・津波	1972年 12月 4日	八丈島東方沖地震(M7.2)
1707年 10月28日	宝永地震(M8.6/東海・東南海・南海が連動)・津波	1973年 6月17日	根室半島沖地震(M7.4)
1755年 11月 1日	リスボン地震(M8.5~9.0)	1978年 1月14日	伊豆大島近海地震(M7.0)
1771年 4月24日	八重山地震(M7.4)・津波	1978年 6月12日	宮城県沖地震(M7.4)
1804年 7月10日	象潟地震(M7.0)	1982年 3月21日	浦河沖地震(M7.1)
1843年 4月25日	十勝沖地震(M7.5)	1983年 5月26日	日本海中部地震(M7.7)・津波
1847年 5月 8日	善光寺地震(M7.4)	1985年 9月19日	メキシコ地震(M8.1)
1854年 12月23日	安政東海地震(M8.4/東海・東南海が連動)・津波	1993年 7月12日	北海道南西沖地震(M7.8)・津波
1854年 12月24日	安政南海地震(M8.4)・津波	1994年 10月 4日	北海道東方沖地震(M8.2)
1855年 11月11日	安政江戸地震(M7.0~7.1)	1994年 12月28日	三陸はるか沖地震(M7.6)
1872年 3月14日	浜田地震(M7.1)	1995年 1月17日	兵庫県南部阪神・淡路大震災(M7.3)
1891年 10月28日	濃尾地震(M8.0)	1999年 8月17日	トルココジャエリ地震(M7.8)
1894年 3月22日	根室沖地震(M7.9)	1999年 9月21日	台湾集集地震(M7.7)
1894年 6月20日	明治東京地震(M7.0)	2000年 10月 6日	鳥取県西部地震(M7.3)
1894年 10月22日	庄内地震(M7.0)	2001年 3月24日	芸予地震(M6.7)
1896年 6月15日	明治三陸地震(M8.1/4)・津波	2003年 9月26日	十勝沖地震(M8.0)
1896年 8月31日	陸羽地震(M7.2)	2003年 12月26日	イランバム地震(M6.8)
1905年 6月 2日	芸予地震(M7.1/4)	2004年 10月23日	新潟県中越地震(M6.8)
1906年 4月18日	サンフランシスコ地震(M8.3)	2004年 12月26日	インドネシア・スマトラ島沖地震(M8.8)・津波
1911年 6月15日	喜界島地震(M8.0)	2005年 3月20日	福岡県西方沖地震(M7.0)
1914年 3月15日	秋田仙北地震(M7.1)	2005年 8月16日	宮城県南部地震(M7.2)
1923年 9月 1日	大正関東地震(M7.9)・津波	2005年 3月28日	パプアニューギニア地震(M8.4)
1927年 3月 7日	北丹後地震(M7.3)	2007年 3月25日	能登半島地震(M6.9)
1930年 11月26日	北伊豆地震(M7.3)	2007年 7月16日	新潟県中越沖地震(M6.8)
1933年 3月 3日	昭和三陸沖地震(M8.1)・津波	2007年 8月15日	ペルー地震(M7.9)
1938年 11月 5日	福島県東方沖地震(M7.5)	2008年 5月12日	四川大地震(M8.1)
1943年 9月10日	鳥取地震(M7.2)	2008年 6月14日	岩手・宮城内陸地震(M7.2)
1944年 1月15日	アルゼンチンサン・ジュアン地震(M7.4)	2010年 1月12日	ハイチ地震(M7.3)
1944年 12月 7日	昭和東南海地震(M7.9)・津波	2010年 2月27日	チリ中部地震(M8.5)・津波
		2010年 9月 3日	カンタベリー地震(M7.0)
		2011年 3月11日	東北地方太平洋沖地震(M9.0)・津波

東北大学生協同組合文系書籍店との対話

— 3.11東北・太平洋沖大震災（東日本大震災）に直面して



震災関係書籍コーナー

川内キャンパス生協では、 3・14食堂再開、 4・4書籍店再開

東北大学生協同組合は東北大学の片平キャンパスに本部、川内、青葉山、星陵、雨宮の各キャンパスに店舗があり、その中に書籍店を備えている組織です。

3・11東北・太平洋沖大震災（東日本大震災）では、仙台市中の他の小売店と同様、日用品も書籍も棚から落ちて散乱し、大きな被害を受けました。文学・教育学・法学・経済学の文系4学部のカンパスとなっている川内南キャンパスの文系4学部生協も例外ではありませんでした。

しかし、比較的被害が小さかった東北大学生協では3月12日には片付けが始まり、すぐに復旧の方針が話し合われました。「ともかく飲食の必要に答えよう」との考えから、川内キャンパスでも文系と川内北の売店は12日から電気もない中で開店して飲食品を販売。電気、水道の回復と共に、川内北の売店では3月14日には、まず提供できるメニューからということでカレーをつくり、学生、周辺住民への提供をスタートしました。

一方、書籍店は4月4日からの再開と決定。「コの字」型に書棚を配置していたことから棚までは倒れなかった文系書籍店では、散乱した書籍の整理も一気に進め、物流の停滞のため雑誌も新刊も届かない状態の中、毎日の利用者は10〜20人程度という営業となりました。生協のホームページを見ると、11〜15時（4月28日まで）、11〜19時（5月6日）、そして5月9日以降10〜20時営業へと変化した経緯を辿ることができます。

この間、大学の安否確認システムを使った学生の安否確認とは別に、生協では携帯

メールなどを使って生協のキャリア支援講座を受講している学生の安否確認を行い、3月14日から2週間程度で約600名への連絡を達成しました。連絡網をもっとスピーディーに確立するためにはどんなシステムにすればよいか。この震災を経て、生協として今後への検討課題にしていることの一つだそうです。

震災関係の書籍への関心

5月6日に行われた学部別入学式によって、東北大学の新年度がスタート。生協も例年どおりの営業状態にもどっていますが、例年とは異なる特異な状況も見られるようです。その一つが震災関係の書籍への関心は高いものの、物流が停滞した後遺症が例年とくらべてやや学生の足が鈍いこと。もう一つは、文学部・文学研究科では教員の著作が教科書になっている例が少なくありませんが、全体としては教科書の点数が例年よりも少な目なこと。

■東日本大震災関連書籍の売上状況

巨大津波が襲った3・11大震災（河北新報社）

喪失と生存の社会学（樽川典子）（有信堂）

朝日新聞縮刷版 東日本大震災（朝日新聞）

東日本大震災（朝日新聞）

災害がほんとうに襲った時（中井久夫）（みすず書房）

現代思想 2011年5月号 特集東日本大震災（青土社）

検証東日本の流言・デマ（荻上チキ）（光文社）

大震災後の日本経済（野口悠紀雄）（ダイヤモンド社）

復興の道なかばで（中井久夫）（みすず書房）

震災で日本経済はどうなるか（藤田勉）（日本経済新聞社）

東日本大震災（読売新聞社）

g2 vol.7 緊急特大号（講談社）

■教科書となっている 文学部・文学研究科教員の主な著作

阿部恒之教授『ストレスと化粧の社会生理心理学』

泉武夫教授『日本美術史ハンドブック』（共著）

大淵憲一教授・阿部恒之教授『心理学の視点20』（共著）

佐藤嘉倫教授『ゲーム理論』

戸島貴代志教授『創造と想起』

原純輔名誉教授『社会調査』（共著）

正村俊之教授『グローバリゼーション』



大学での生活が例年よりも1ヵ月少ない状態では、学生の、書籍に関心を向けるエネルギーが小さいのはやむを得ないところなのかもしれません。

**6・7月には、
「専門書3社合同フェア」開催**

どのようにして活気を取り戻していくか。東北大学生協書店統一企画として、6月13日～7月30日の期間「専門書3社合同フェア」を実施しています。

生協組合員に対して、岩波書店、みすず書房、東京大学出版会という3社の刊行物（ただし文庫・新書・雑誌を除く）が15%OFFとなる上、売上の5%は被災した東北大学生への支援にまわされるという企画です。

この3社からは文学部・文学研究科教員の、石丸正氏（文学部卒）、木田元氏（文学部卒）、今野勉氏（文学部卒）、佐藤郁哉氏（文学研究科修了）、澤村美幸氏（文学研究科修了）、山折哲雄氏（文学部卒・文学研究科修了）ら同窓生の著作等も出版されており、これを機会に学生に読まれるようになることも期待されるところです。

■専門書3社から発行されている 文学部・文学研究科関係者の著作例（50音氏名順）

<岩波書店>

- 明日香壽川教授 『地球温暖化—ほぼすべての質問に答えます！』（岩波ブックレット）
- 岩田靖夫名誉教授 『アリストテレスの政治思想』
『神なき時代の神—キルケゴールとレヴィナス』
- 木田元氏 『一日一文—英知のことば』
『猿飛佐助からハイデガーへ—ゲーテンベルクの森』
- 小林隆教授 編集『シリーズ方言学』（執筆：1.方言の形成、4.方言学の技法）
『方言が明かす日本語の歴史』
- 今野勉氏 『それでもテレビは終わらない』（岩波ブックレット）
- 澤村美幸氏 『日本語方言形成論の視点』
- 直江清隆准教授 共著『科学／技術の哲学』（岩波講座哲学09）
訳『技術への問い』（アンドリュ・フィーンバーク著）
- 野家啓一教授 『歴史を哲学する』（双書哲学塾）
共著『歴史21世紀へのキーワード』（インターネット哲学アゴラ）
共同編集『哲学・思想事典』
- 山折哲雄氏 『死に方上手—いのちの対話』（岩波ブックレット）
『近代日本人の美意識』
- 吉原直樹名誉教授 『開いて守る—安全・安心のコミュニティづくりのために』（岩波ブックレット）

<みすず書房>

- 岩田靖夫名誉教授 『ギリシア人と非理性』
- 石丸正氏 訳『災害の襲うとき』（ビヴァリー・ラファエル著）

<東京大学出版会>

- 片岡龍准教授 共著『公共する人間1 伊藤仁斎』
- 佐藤郁哉氏 『現代演劇のフィールドワーカー—芸術生産の文化社会学』
- 佐藤嘉倫教授 『意図的社会変動の理論—合理的選択理論による分析』
- 長岡龍作教授 『講座日本美術史4 造形の場』
- 原純輔名誉教授 共著『社会調査演習』
共著『社会階層—豊かさの中の不平等』
- 正村俊之教授 『グローバル社会と情報的世界観—現代社会の構造変容』
- 吉原直樹名誉教授 『モビリティと場所—21世紀都市空間の転回』

なお東北大学生協は東北大学関係者以外でも出資金（1口25,000円／組合脱退時に返金を支払って組合員になり、購読できます。足を運んでみてはいかがでしょうか。）

**近い将来には、
東北大学出版会フェアの企画も**

また文系書籍店には東北大学関係者の書籍コーナーが設けられており、東北大学出版会発行の書籍も並んでいます。書籍部としては、東北大学出版会と連携してコーナーを拡大するなり、フェアを開くなりしたいとの考えもついています。

東北大学出版会発行の書籍は2011年6月末現在266冊にのびりますが、2011年11月に発行された正村俊之教授編集



の人文社会科学へ講演シリーズ『生と死への問い』など文学部・文学研究科関係者の著作も多数含まれています。



2010年度の 売れ行き状況を振り返る

—故・原研二教授の 『白雪姫たちの世紀末』に注目

震災以前の1年間、文系書籍店では、「人文社会」「文芸」「新書・文庫」のジャンル別には次のような売上状況でした。「人文社会」系では資格試験や就職活動のマニュアル本が上位に入っていますが、文学部・文学研究科教員の著作（太字）も目立っています。またジャンルを問わず、東北大学法学部卒で仙台在住の作家・伊坂幸太郎さんの著作の人気は抜群です。

そして、文芸書の中の『白雪姫たちの世紀末——闇の女王をめぐるヨーロッパ19世紀末の文化論』（郁文堂）に注目ください。文学部・文学研究科のドイツ文学研究者、故・原研二教授の遺著であり、グリム童話の「白雪姫」の物語を縦糸に、女性像の変容という視点からヨーロッパ世紀末の文化状況を読み解いたもの（2010年11月8日、読売新聞日曜版の野家啓一教授による書評）です。さすが、文系書籍店と言えるのではないのでしょうか。



『白雪姫たちの世紀末——闇の女王をめぐるヨーロッパ19世紀末の文化論』

■2010年度の人文社会系書籍のベスト50

これからの「正義」の話をしよう
マイケル・サンデル（早川書房）
心の哲学入門 金杉武司（勁草書房）
養育費政策にみる国家と家族
下夷美幸准教授（勁草書房）
スッキリわかる日商簿記2級
滝澤ななみ（TAC出版）
倫理学の地図 篠沢和久他編（ナカニシヤ出版）
社会心理学概説 潮村公弘他編（北大路書房）
心理学の視点20 阿部恒之教授大淵憲一教授共著（国厚文印刷社）
ゲーム理論 佐藤嘉倫教授（新曜社）
日本思想史ハンドブック 片岡龍准教授共編（新書館）
学習指導要領は国民形成の設計書
水原克敏（東北大学出版会）
社会科学的想像力 ミルズ（紀国屋書店）
発達心理学 本郷一夫（建帛社）
これが本当のSPI2だ！ SPIノートの会（洋泉社）
絶対内定く2012自己分析とキャリアデザインの描き方
杉村太郎（ダイヤモンド社）
よくわかる社会福祉 山縣文治他編（ミネルヴァ書房）
文章理解の心理学 秋田喜代美他編（北大路書房）
20歳のときに知っておきたかったこと
ティナ・シーリグ（阪急コミュニケーションズ）
知性と感性の心理 行場次朗教授共著（福村出版）
セックス・アンド・ザ・シティのキュートな欲望
キム・アスカ（朝日出版）
教育法規スタートアップ 高見茂他編（昭和堂）
社会調査[改訂版]
原純輔名誉教授共著（放送大学教育振興会）
公務員試験 現職人事が書いた（シリーズ）
大賀英徳（実務教育出版）
Q&A 大学生のアスペルガー症候群
福田真也（明石書店）
この業界・企業でこの「採用テスト」が使われている
SPIノートの会（洋泉社）
ハーバード白熱教室講義録（上・下）
マイケル・サンデル（早川書房）
発達障害大学生支援への挑戦
斎藤清二他（金剛出版）
ミクロ経済学 奥山利幸（白桃書房）
フェラーリと鉄瓶 奥山清行（PHP研究所）
すべらない就活 原田康久（中央公論新社）
新・公務員試験対策パスラインシリーズ
文章理解（時事通信社）
公務員の仕事入門ブック（実務教育出版）
社会統計学 W・ボンシュエット他（ハーベスト社）

■2010年度の文芸書のベスト50

IQ84<BOOK1・2・3> 村上春樹（新潮社）
校注徒然草 稲田利徳（和泉書院）
現代詩一作品と資料 太田登他（桜楓社）
マリアビートル 伊坂幸太郎（角川書店）
デザインのデザイン 原研哉（岩波書店）
天地明察 冲方丁（角川書店）
フリー 無料からお金を生み出す新戦略 クリス・アンダーソン（日本放送出版協会）
謎解きはディナーのあとで 東川篤哉（小学館）
バイバイ、ブラックバード 伊坂幸太郎（双葉社）
日本人の知らない日本語（シリーズ） 蛇蔵（メディアファクトリー）
オー！ファーマー 伊坂幸太郎（新潮社）
砂漠 伊坂幸太郎（新潮社）
猫物語（黒、白） 西尾維新（講談社）
嘔吐 新訳 J・P・サルトル（人文書院）
傾物語 西尾維新（講談社）
細野真宏の最新の経済と政治のニュースが世界一わかる本！ 細野真宏（文芸春秋）
Jブンガク ロバート・キャンベル（東京大学出版会）
万葉事始 坂本信幸他編（和泉書院）
ゲゲゲの女房（1・2・3） 武良布枝（実業之日本社）
無縁社会 日本放送協会（文藝春秋）
夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹（文芸春秋）
第二の手、または引用の作業 アントワーズ・コンパニオン（水声社）
選択の科学 シーナ・アイエンガー（文藝春秋）
ペンギン・ハイウェイ 森見登美彦（角川書店）
最強「内定」請負人 就活の答え 柳本新二（講談社）
池上彰の学べるニュース 池上彰（池亀社）
この国を出よ 大前研一他（小学館）
中国名詩集 井波律子（岩波書店）
傷物語 西尾維新（講談社）
マンチュリアン・レポート 浅田次郎（講談社）
偽物語 西尾維新 講談社
萬葉集再読 佐竹昭広（平凡社）
ことばの哲学 池内紀（青土社）
西洋美術の歴史 ホースト・ウォールデマー・ジャンソン（創元社）
白雪姫たちの世紀末 原研二（郁文堂）
沈黙の時代に書くということ サラ・パレツキー（早川書房）
神様のカルテ 夏川草介（小学館）
この人から受け継ぐもの 井上ひさし（岩波書店）
つながり ニコラス・A・クリスタキス（講談社）
苦役列車 西村賢太（新潮社）
村上春樹 雑文集 村上春樹（新潮社）
愛蔵版 グレート・ギャツビー F・S・フィッツジェラルド（中央公論新社）
現代人の祈り 釈徹宗他（サンガ）
KAGEROU 齋藤智裕（ポプラ社）
錯覚の科学 クリストファー・チャプリス（文芸春秋）
二十歳の君へ 東京大学立花隆ゼミ（文芸春秋）
松岡正剛の書棚 松岡正剛（中央公論新社）
きことわ 朝吹真理子（新潮社）

■2010年度の新書・文庫のベスト50

思考の整理学 外山滋比古（ちくま文庫）
告白 湊かなえ（双葉社）
砂漠 伊坂幸太郎（新潮文庫）
夜は短し歩けよ乙女 森見登美彦（角川文庫）
四畳半神話大系 森見登美彦（角川文庫）
大学生のためのレポート・論文術 小笠原喜康（講談社現代新書）
日本辺境論 内田樹（新潮新書）
残念な人の仕事の習慣 山崎将志（アスコムBOOKS）
国家く上> プラトン（岩波文庫）
ノルウェーの森く上・下> 村上春樹（講談社文庫）
更級日記 菅原孝標/川村裕子編（角川ソフィア文庫）
ゴールデンスランバー 伊坂幸太郎（新潮文庫）
国家く下> プラトン（岩波文庫）
戦後史 中村政則（岩波新書）
漢文法基礎 加地伸行（講談社学術文庫）
サンデルの政治哲学 小林正弥（平凡社新書）
新釈走れメロス 森見登美彦（祥伝社文庫）
税法入門 金子宏（有斐閣新書）
グラスホッパー 伊坂幸太郎（角川文庫）
日本の経済 伊藤修（中公新書）
日本の教育格差 橘木俊昭（岩波新書）
攻撃と暴力 大淵憲一教授（丸善ライブラリー）
理科系の作文技術 木下是雄（中公新書）
有頂天家族 森見登美彦（幻冬舎文庫）
レポートの組み立て方 木下是雄（ちくま学芸文庫）
子どもの貧困 阿部彩（岩波新書）
競争と公平感 大竹文雄（中公新書）
伝える力 池上彰（PHPビジネス新書）
クジラの彼 有川浩（角川文庫）
きつねのはなし 森見登美彦（新潮文庫）
虐殺器官 伊藤計劃（ハヤカワ文庫JA）
菊と刀 ルース・ベネディクト/長谷川松治名誉教授訳（現代教養文庫）
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神く上・下> マックス・ヴェーバー（岩波文庫）
青色本 ウイトゲンシュタイン（ちくま学芸文庫）
完訳 統治二論 ジョン・ロック（岩波文庫）
金閣寺 三島由紀夫（新潮文庫）
蒼路の旅人 上橋菜穂子（新潮文庫）
ことばと思考 今井むつみ（岩波新書）
阪急電車 有川浩（幻冬舎文庫）
太陽の塔 森見登美彦（新潮文庫）
雪国（改版） 川端康成（岩波文庫）
デフレの正体 篠谷浩介（角川oneテーマ21）
美丘 石田衣良（角川文庫）
わかりやすく「伝える」技術 池上彰（講談社現代新書）
人はいかに学ぶか 稲垣佳世子（中公新書）
文科系必修研究生活術 東郷雄二（ちくま学芸文庫）
死亡フラグが立ちました！ 七尾与史（宝島社文庫）

東北大学文学部の

歴代研究者

メモリアル 6



1936-41年、

哲学とドイツ文学講座を担当し
『ヘーゲルからニーチェへ』を著した

カール・レーヴィット

Karl Löwith

1937年、仙台で、妻・アーダと一緒に
カール・レーヴィット博士
(カール・レーヴィット 著・秋間実訳
『ナチズムと私の生活—仙台からの告発』より)

ノース・カロライナ大学の或る勤め口のための交渉は、成果なく終わり、イタリアではドイツ語授業の講師の口を手に入れることさえ不可能であり、ボゴタへの招聘をめざした計画は、さきに言ったとおり、実現しなかった。そのとき、わたしは、一九三六年六月、日本から一通の電報を受け取って、自分が仙台の[東北帝国]大学へ招聘されたことを知った。この招聘を斡旋してくれたのは、九鬼教授であった。あとで聞いたところでは、[東京の]ドイツ公使館とドイツ文化研究所とがわたしの招聘を人種政策上の理由で阻止しようと努めたけれども、その目標を達成しなかったのだそうである。

これは、哲学者・カール・レーヴィット博士の『ナチズムと私の生活—仙台からの告発』の一節です。同書は、博士が1941年に日本を離れてアメリカに渡ってからまとめられたものであり、原題は『Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933: Ein Bericht』(1933年以前および以後のドイツにおけるわたしの生活—一つの報告)。ナチスの迫害を逃れて日本に亡命し、九鬼周造博士(当時、京都帝国大学教授)の尽力で東北帝国大学 法文学部の教壇に立つに至った経緯がわかります。なお、この時、法文学部でフランス文学を担当していた河野与一教授が、その語学力を買われて神戸まで迎えに行ったことが、河野著『続 学問の曲り角』(1986年 岩波書店)中の「レーヴィット 今昔」に記されています。



『ナチズムと私の生活—仙台からの告発』

Profile

ドイツ・ミュンヘン生まれの哲学者・哲学史家。1897-1973年。フライブルク大学でM. ハイデガーに師事したが、1936年、ナチスから逃れて来日し、41年まで東北帝国大学法文学部教師として哲学、ドイツ文学講座を担当。教壇に立つかたわら思索を深め、ナチスの思想的支柱となっていたハイデガーを批判。1941年にアメリカへと渡った後、1952年からK.ヤスパーズの後任としてハイデルベルク大学教授となった。



熊野純彦編著
『日本哲学小史』
(2000年 中公新書)

レーヴィット博士と 東北帝国大学法文学部哲学科

カール・レーヴィット博士のプロフィールを概観してみよう。1917年、ミュンヘン大学で生物学、哲学などを学ぶ中で、マックス・ヴェーバーやアルベルト・シュヴァイツァーとの出会いを経験し、1919年にフライブルク大学へ移り、そこではエドムント・フッサール、マルティン・ハイデガー師弟と出会っています。1922年にミュンヘン大学にもどってモリッツ・ガイガーの指導のもと、学位請求論文『ニーチェの自己解釈とニーチェの諸解釈についての解明』を執筆し、1924年には、ハイデガーの後を追ってマールブルクへ移ります。そこでハイデガーの指導のもと、教授資格請求論文『共に在る人間の役割における個人—倫理的諸問題の人間学的基礎づけのために』を提出し、1931年の夏学期から、フライブルクへ移ったハイデガーの後任の私講師として講義室に立ったのです。ところで、東北大学文学部に在籍していた(1996-2000年)倫理学専攻分野助教授ことのある東京大学文学部・熊野純彦教授の『日本哲学小史』(2009年)の中に、東北大学の哲学研究黎明期の歴史に関して

三宅(剛一)は岡山の第六高等学校で高橋里美からドイツ語を教わっている。高橋が東北帝国大学理学部の「科学概論」担当となったとき、高橋の後を襲って新潟高校に赴任、さらに高橋が法文学部に配置替えになったとき、高橋の講義していた「科学概論」担当者となって仙台へと居を移した。フライブルクに留学して、フッサールの教えを受け、またハイデガーとも交流をもっている。そのうち哲学科に移籍して、東北大では、滝浦静雄、新田義弘、木田元などの、戦後の現象学研究にあって中心的な役割を果たした研究者に影響を与えた。

という一節があります。東北大学の哲学研究の基盤をつくった高橋里美博士(1886-1964年/東北大学在籍1921-48年)がフライブルクに留学したのは1925-28年、三宅剛一博士(1895-1982年/東北大学在籍1924-54年)がフライブルクに留学したのは1930-32年でした。カール・レーヴィット博士とはすれ違いでフッサールやハイデガーに学び、東北大学へと持ち帰った二人は、レーヴィット博士の弟子になるわけです。その後、レーヴィット博士は、ナチズムの台頭に追われ、ニーチェを主題とする講義を最後にイタ

仙台における レーヴィット博士

カール・レーヴィット博士が仙台に居を定めたのが1936年秋。

リアへ。イタリアでは、『ヤーコプ・ブルクハルト』を執筆します。しかし迫害はさらに厳しくなり、1936年、日本へと亡命し、東北帝国大学教師となって哲学とドイツ文学講座を担当。1941年にアメリカへと移るまでの期間、東北大学で教壇に立つかわり、1939年には『ヘーゲルからニーチェへ』をまとめ、1940年には『思想』に『ヨーロッパのニヒリズム—ヨーロッパ戦争の精神的前史のための考察』を執筆するなどしたのです。(以上、熊野純彦訳『共同存在の現象学』解説等を参照)

■レーヴィット博士の担当科目

1937年度(昭和12)

哲学
Die deutsche Philosophie von Hegel bis Nietzsche
哲学演習
Hegel, Rechtsphilosophie
独文学
Herders Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit

1938年度(昭和13)

哲学講義
Die deutsche Philosophie von Hegel bis Nietzsche
哲学演習
Kierkegaard: Der Begriff der Angst
独文学
Novalis (Fragment)

1939年度(昭和14)

哲学講義
Von Hegel bis Nietzsche (letztes Teil)
哲学演習
Kierkegaard: Der Begriff der Angst
独文学講義
Novalis

1940年度(昭和15)

哲学講義
Zeit und Geschichte (mit Bezug auf Heidegger)
哲学演習
Hegels Theologische Jugendschriften
独文学講義
Holderlin (Hyperion)

哲学専攻では哲学の講義と演習を担当し、独文学専攻では独文講義を担当しました。当時の「法文学部学生要覧」から、そのテーマを知ることができます。

住まいは仙台市片平丁の大学官舎でした。夏には、当時、軽井沢、野尻湖と並んで「日本三大外国人避暑地」といわれた七ヶ浜村(現、七ヶ浜町)高山の外国人避暑地も利用していたようで、大学内外で公私にわたって親交のあったフランス語学・フランス文学科の河野与一教授宛てのハガキに「宮城郡塩竈高山」の記載が見られます。残念ながら当時の博士ご夫妻の写真は東北大学史料館にも文学部にも残っておらず、官舎で撮影されたと思われる冒頭の1枚だけしか知られていませんが、



熊野純彦訳
『共同存在の現象学』
(2008年 岩波文庫)
教授資格請求論文の
邦訳。本書の邦題に
は意訳が施されている。



木田元著
『ピアノを弾くニーチェ』
(2009年 新書館)

『ナチズムと私の生活—仙台からの告発』の中に、仙台、日本での生活について次のような感慨が記されています。

わたしどもを日本で迎えるそのご仙台上に案内してくれた人びとの格段の礼儀ただしさと親切とは、予想をはるかに上まわるものであった。仙台では大学の宿舍を自由に使うことができ、「一九三七年」一月には「ドイツから送り出した」家具と書物とが届いて、わたしどもはすぐに、住みなれた家になるようにくつろいだ気持ちになった。その結果、ときどき言いまらがいをして、「仙台」と言うところを「マルブルク」と言ったりする始末であった。新しいものの魅力とたくさんのもものめずらしい印象のおかげで、わた

しどもの生活は新たに活気づき、これによってわたしどもは、孤立「仙台」では、クルト・ジンガー氏のほかには、ただ一人だけのドイツ人であった」と、この移住にともなう身体上の疲れとに、はじめは気づかなかったのである。仙台に暮らしているアメリカ人宣教師たちとなんらかのカトリック信徒たち（たいていはカナダ人で、イタリア人が二人、スイス人が一人いた）とは、ごくゆっくりすこしずつ親しくなっていた。

同書には、以下、仙台と日本で会ったドイツ人の話、亡命者の話、ナチズムの話などが続き、「世界史は、ヒトラーよりも利口であった。すなわち、ヒトラーは、たしかに欲しはしなかったが、いまやイギリスと戦わなければならず

し、そして、イギリスは、いま、ごく派生的な意味においてにせよ「ローマ的」使命を代表している」、そのうえ、これもドストエフスキーが予見していたとおり、ヨーロッパの二番目の対抗勢力ロシアと同盟を結ばなければならぬのである。ドイツは、ヨーロッパあるいは全キリスト教徒の中心部ではなく、ヨーロッパ解体の中心である。」と結ばれています。

（そして、イギリスは、いま、ごく派生的な意味においてにせよ「ローマ的」使命を代表している）、そのうえ、これもドストエフスキーが予見していたとおり、ヨーロッパの二番目の対抗勢力ロシアと同盟を結ばなければならぬのである。ドイツは、ヨーロッパあるいは全キリスト教徒の中心部ではなく、ヨーロッパ解体の中心である。」と結ばれています。

仙台でまとめられた 『ヘーゲルからニーチェへ』

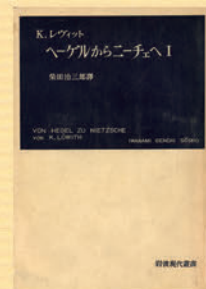
レーヴィット博士が東北大学を去ってから10年後の1950年に文学部に入学した哲学者・木田元氏（1953年卒、1958年・文学研究科修了。1958-60年、文学部助手・講師）は、『ピアノを弾くニーチェ』の中で、レーヴィット博士の「この人・この三冊」として

①『ヘーゲルからニーチェへ』

②『共同存在の現象学』

③『ナチズムとわたしの生活—仙台からの告発』

をリストアップしています。『ヘーゲルからニーチェへ』については「仙台滞在中に執筆したのが①であり、この壮大な十九世紀ドイツ精神史が、結局はレーヴィットの主著ということになりそうだ。私たちの世代にとっては必読の書



柴田治三郎譯
『ヘーゲルからニーチェへ』
(1952年 岩波現代叢書)

の一つだったがいまは品切れだそう。ご時勢ですな」と書き、『共同存在の現象学』については「この論文はハイデガーの『存在と時間』をある面で補強しようとするものだが、巻末に付けられたゆきとどいた訳者の解説をもふくめて、目下のところレーヴィットの著作への最良の案内書だと言つてよい」と記しています。この『ヘーゲルからニーチェへ』(Von Hegel zu Nietzsche)の一部を引用してみましよう(左上)。

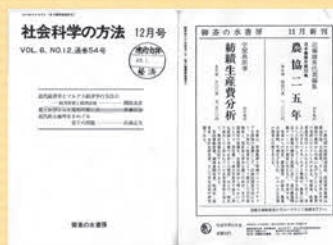
ところで、木田元氏が挙げたこの2冊とも、翻訳は東北大学文学部関係者となっています。『ヘーゲルからニーチェへ』は、1936年に法文学部を卒業し、1946-72年に文学部助教授・教授の経歴を持つ柴田治三郎東北大学名誉教授の、そして『共同存在の現象学』は、前述した熊野純彦東京大学教授の翻訳です。

実は、これらのほかのレーヴィット博士の著作も、次ページのリストに示したように多くの東北大学関係者によって翻訳されているのです。

（柴田治三郎訳『ヘーゲルからニーチェへ』中「第一版への序文」—1939年春 仙台にて—岩波現代叢書より）



『図書』の
柴田治三郎氏寄稿



『社会科学の方法』1973年12月号には、
斎藤信治氏が「K.レーヴィット先生の思い出」
を寄稿した

■東北大学関係者の翻訳になるレーヴィット博士の著作

斎藤信治(1934年・法文学部卒)共訳

『フォイエルバッハ』(1971年。福村出版)

柴田治三郎(1936年・法文学部卒。1946-72年・法文学部・文学部助教授・教授)訳

『ヨーロッパのニヒリズム』(1948年。筑摩書房)

『ウェーバーとマルクス』(共訳。1949年。弘文堂書房)

『実存主義の哲学的背景—ハイデッガーとバスキア』(1950年。弘文堂書房)

『ヘーゲル・マルクス・キェルケゴール』(1951年。要書房)

『ヘーゲルからニーチェへ—十九世紀の思想における革命的決裂

マルクスとキェルケゴール』(1952年。岩波現代叢書)

『世界と世界史』(1959年。岩波現代叢書)

『ニーチェの哲学』(1960年。岩波現代叢書)

『バスキアとハイデッガー—実存主義の歴史的背景』(1967年。未来社)

『神と人間と世界—デカルトからニーチェまでの形而上学における』(1973年。岩波現代叢書)

中川秀泰(1938年・法文学部卒。1938-45年・法文学部非常勤講師等)訳

『キェルケゴールとニーチェ』(1943年。弘文堂書房)

中村啓(1952年・文学部卒。名誉教授)・永沼更始郎(1954年・文学部卒、

1968年・文学研究科修了)共訳

『ある反時代的考察—人間・世界・歴史を見つめて』(1992年。法政大学出版局)

市場芳夫(1954年・文学部卒。62年・文学研究科修了)訳

『ヤーコプ・ブルクハルト—歴史のなかの人間』

(1977年。みすず書房)

中村志朗(1954年・文学部卒。1967-95年・文学部助教授・教授。名誉教授)訳

『ポール・ヴァレリー—その哲学的思维的の概要』

(1980年。未来社)

杉田泰一(1961年・文学部卒。63年・文学研究科修了)・

岡崎英輔(1964年・文学部卒。67年・文学研究科修了)訳

『ハイデッガー—乏しき時代の思索者』(1968年。未来社)

熊野純彦(1996-2000年・文学部助教授)訳

『共同存在の現象学』(2008年。岩波文庫)



1973年、
レーヴィット博士逝く

レーヴィット博士は、1940年、岩波書店『思想』9・10・11月号に『ヨーロッパのニヒリズム』(Der europäische Nihilismus)を発表。日本の読者に与へる跋で「ヘーゲル流に云へば、彼等(日本人・編集部注)は「他在に於いて自分を失はざるに在る」ことなのである。二階建の家に住ん

でゐるやうなもので、階下では日本的に考へたり感じたりするし、二階にはプラトンからハイデッガーに至るまでのヨーロッパの學問が紐に通したやうに並べてある。そしてヨーロッパ人の教師は、これで二階と階下を往き来する梯子は何處にあるのだらうかと、疑問に思ふ。本當のところ、彼等はあるがままの自分を愛してゐる。[キリスト教的]認識の木の実をまだ食べてゐないので、純

潔さを喪失してゐない。人間を自分の中から取り出し、人間を自分に對して批判的にするあの喪失を嘗めてゐないのである。(柴田治三郎訳『ヨーロッパのニヒリズム』1948年 筑摩選書より)

といった言葉を綴つた上で、1941年、日独伊三国同盟締結、太平洋戦争へと雪崩込んでいく日本を離れ、アメリカへ。そして1952年、ドイツへと戻りました。

その後、1958年、東京で開かれた国際宗教学・宗教史学会のために来日した折に来学。講義を行ったことが、1959年発行の東北大学文学部紀要「文化」第23巻第1号、エトムント・ヘルツェン「スケプスィスとテオリア—レーヴィットの哲学について—」の訳者附記に「一九五八年九月、レーヴィット教授の東北大学における連続講義にさいして、ヘルツェン氏は教授の哲学を紹介する講演を試みた」と記されています。しかし、博士の講義内容を伝える論稿は見つけれませんでした。そして1973年5月24日、スイスのカロリーナにて逝去。その報に接し、レーヴィット博士の教授を受けた柴田治三郎名誉教授、中川秀恭氏らが哀悼の言葉を記しています。岩波書店『図書』1973年9月号に「カル・レーヴィッ

ト教授のこと」を寄稿した柴田氏は、レーヴィット博士が着任した当時、まだ過つて、

レーヴィット先生が東北大学の外人教師として赴任されたのは、昭和十一年の秋である。着任最初の講義は小雨の降る日、薄暗くなつてから、大きな階段教室で行われた。私はドイツ文学科の助手だったが、ともかく「新しい、外人教師」の話を聞きに出た。聴講者は数十人いた。題目は何だったか、もう覚えていない。爾来五年間、先生は主として哲学を担当されたが、週に一回だけドイツ文学の演習も受け持たれ、(中略)私はいつのまにか、その時間には抜けれなくなつてゐた。学生がいつも二人しかいなかったからばかりではなく、なんとなく私が先生の助手のような役をするようになってゐたからである。といった経緯、大学やお手伝いさんとの交渉ごとや博士に日本語を教える役目を担うことになつた思い出などを綴つた上で、先生もこのカロリーナで、最後の病床にあつて、神をまつたく知らない私などと同じく、「余念なし(ウンシユルデヒ)」に(ニーチェ)この鐘の諧音に耳をすませたことであらうと、想像される。と結んでゐます。

『中世日本の周縁と東アジア』の 成果から、さらに豊穡な“地域史”へ

写真は、平泉中尊寺金色堂覆堂。内部にある金色堂は6月末のユネスコ世界遺産委員会で「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群」の一つとして世界文化遺産に登録された。

3・11当日、そして3・11以後

2011年2月、東北大学文学研究科日本史専攻分野の柳原敏昭教授は、中世地域史研究の成果として『中世日本の周縁と東アジア』を刊行しました。この本を軸に教授の研究を紹介していきますが、その前に3月11日のことに触れないわけにはいかないでしょう。

当日、柳原教授は沖縄県久米島で「上洲家(うえすけ)文書」という古文書の共同研究に参加していました。最近の古文書研究では、記された内容や様式だけでなく、用いられた紙の組成や製法にまで関心が向けられています。柳原教授は顕微鏡などの調査器具を携え、古文書の紙質調査を行っていたのです。

東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)が発生したのは、柳原教授らがまさに久米島空港で帰りの飛行機に乗り込もうかという時でした。もちろん仙台空港は閉鎖され、東北新幹線も不通となりました。そのため、仙台に戻ることはできたのは1週間後のこと。研究室は、書棚そのものは倒れなかつ



歴史科学
柳原敏昭教授

Yanagibara Toshiaki

Profile

1961年新潟県生まれ。1984年東北大学文学部卒・1990年文学研究科博士後期課程中退。鹿児島大学講師・助教授を経て、1997年東北大学へ。著書に『中世日本の周縁と東アジア』(2011年2月)、共編著に『鎌倉・室町時代の奥州』(2002年)、『展望日本歴史9 中世社会の成立』(2001年)、論文に『中世前期南薩摩の湊・川・道』(『中世のみちと物流』所収)、『西の境界領域と万之瀬川』(『境界の日本史』所収)、『寺塔已下注文の新解釈をめぐって』(『平泉・衣川と京・福原』所収)、『中世日本の北と南』(日本史講座4『中世社会の構造』所収)、『解説に「奥羽史料調査部—地域史研究の先駆—」(『ものがたり東北大学の至宝』所収)、『共同執筆「東北大学史料館所蔵「大島正隆文書」目録』など。

ものの、書籍や器物で埋もれている状態でした。

地震と津波は、人々から生命と生活・財産を奪い取りました。それとともに忘れてはならないのは、数多くの文化財や古文書などの歴史資料(史料)が失われ、被災したということ。柳原教授は、宮城歴史資料保全ネットワーク(略称・宮城史料ネット。理事長・平川新東北大学東北アジア研究センター教授)の一員です。この組織は、2003年の宮城県北部地震にさいして宮城県在住の歴史研究者を中心に結成され、災害時の史料救出や、日常的な史料所在調査にあたりてきました。今回も震災直後から活動を開始しています。なぜ、このようなことを行うのでしょうか。

もちろん史料が歴史研究の素材であるということがあげられます。しかし、それだけではありません。今回の震災においても被災された方々が、津波で流された自宅周辺で写真やアルバム、手紙・日記等をさがしている様子がしばしば目撃されました。それらが家族や個人の大切な記憶であり、生きていくうえで重要なものだからです。

同じように地域の史料は、人々が様々な営みを行ってきたことの証であり、それを残すことは過去と現在・未来をつないでいくこととなります。

柳原教授は日々、史料が失われていくという現実を前にして、少しでもそれを未来に残すことが必要と考え、今、宮城史料ネットの史料救出活動に参加しています。加えて、歴史上の地震・津波と、それらへの人々の対応があらためて注目され、知人の中世史研究者が存在を指摘した津波史料が若狭湾の原子力発電所の帰趨にかかわるほどの影響を与えたこと(『朝日新聞』2011年5月27日)など、目をの当たりにして、歴史学の社会的責任について考えをめぐらしています。



「宮城歴史資料保全ネットワーク」の文化財レスキュー活動の一例

『中世日本の周縁と東アジア』の、 北からの中世史、南からの中世史

では、2011年2月に刊行された柳原敏昭教授の『中世日本の周縁と東アジア』は、どのような内容のものなのでしょうか。

次ページに目次を示してありますように、第一部で鹿児島県万之瀬川下流域(現南さつま市)の中世の姿を詳細に復原し、そこを基点としながら、第二部・第三部で九州・日本列島・東アジアへと広がる人や物の流れを考え、最後の第四部で中世の南九州と東北との比較を行っています。日本中世国家の南の周縁部であった南九州の一地域の分析を中心としながら、北の周縁部＝東北も視野に入れ、さらに問題を東アジア規模で考えようというものになっていることがわかります。

たとえば第四部「国家周縁地域の比較史」では、第一には北東北(北緯三九度以北)と南九州(鹿児島県域)を活動の場とした地域権力ないし領主として平泉藤原氏(平泉を拠点とした藤原三代)と阿多氏(阿多郡を本拠とした薩摩平氏一族)をとりあげ(図A B C参照)、彼らが国家と地域住民、あるいは国家の内と外との接点となつて地域の特質と矛盾を体现している実態を比較検討すること、第二には交易に注目し、異質なものが接触し、混じり合う実態を分析することを標榜。

平泉については、特に一九八八年に始まった柳之御所遺跡

の発掘調査以来、様々なことが明らかにされている。ここでは、陸奥国を縦貫する奥大道と太平洋海運に連結する北上川の結節点に立地していた流通・交易上の拠点であったことを重視したい。

と述べ、阿多郡については、

阿多郡は、薩摩半島第一の河川、万之瀬川の下流域にあたる。この地域では最近、持鉢松遺跡など十二世紀半ば～十三世紀に對外交易が活発であったことを示唆する遺跡が相次いで発掘されている。また、万之瀬川旧河口部左岸(加世田別府側)には唐坊と称される場所があった。唐坊は古代・中世最大の貿易港博多にもあり、宋商人の集住する交易の中心であった。この地名は九州各地に見られ、博多よりはるかに小規模であったにしても、その中に宋代の経済発展に伴って進出した中国商人の居留地が含まれている可能性がある。加世田別府唐坊も同様に考えてよからう。このほか、万之瀬川下流域からは北九州・畿内・東海地方との関係を示す遺物も数多く出土している。阿多氏の本拠地も中世国家の周縁部にできた交通の要衝であり、交易の拠点だったのである。

と述べ、平泉と阿多郡という、中央からは等距離にある北と南の地域に、一国ひいては日本国家内の位置、その性格において多くの類似点が認められると論じています。そして、平泉の交易については

近年、外浜を含めた津軽地方から平泉藤原氏との密接な関係を示すカワラケや陶磁器を出土する遺跡が特異的に数多く見つかつており、藤原氏の北方経営拠点と評価されている。北方産物は外浜周辺にもたらされ、奥大道を通じて平泉へ、さらには京都へと運ばれたと考えられる。京都へは、北上川舟運・太平洋海運の利用もあつたであろうと分析し、阿多郡の交易については

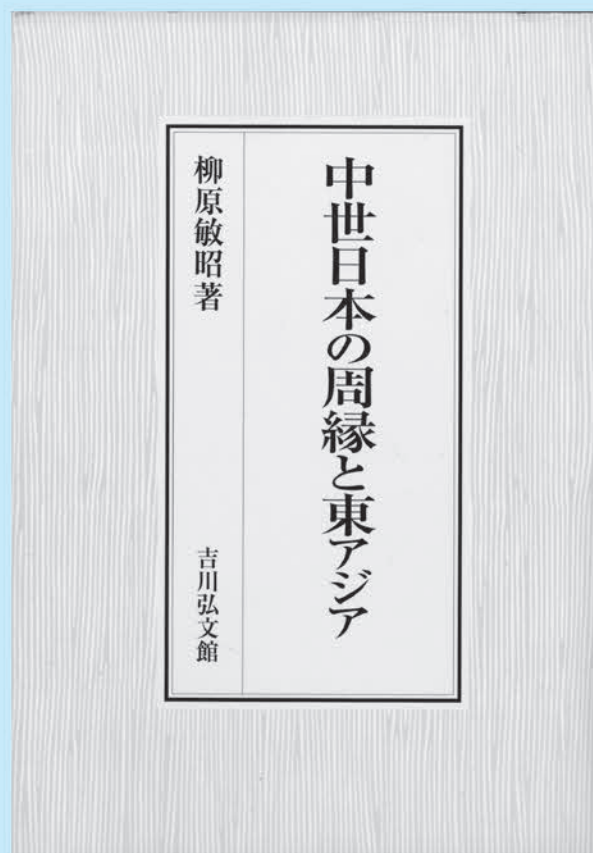
九州島以北の日本国をエリアとする商人集団がかかわっていたとする説、②南西諸島一帯をエリアとする商人集団と肥前系商人集団および薩摩平氏の関与を想定する説、③博多商人を主体とする説などが出され、決着にはなおデータの蓄積が必要な段階にある。ただ、注目すべきは、万之瀬川下流域の遺跡からもカムイヤキと滑石製石鍋が出土していることである。肥前平氏と薩摩平氏とが密接な関係にあったことも知られている。万之瀬川河口部が九州島以北と南西諸島との交通・交易の中継機能を果たしていたと想定できるであろうし、また、阿多氏の関与もありえたであろう。

と分析して、日本国の内と外との狭間にあつて自立性を高めつつあつたのが藤原氏であり、阿多氏であつたのではなからうかと述べています。

と述べています。

■柳原教授が研究対象とした
中世日本の北と南の周縁部





序章

- 一 研究対象
- 二 研究史の整理
- 三 本書の課題と構成

第一部 南の周縁＝万之瀬川下流域のすがた

- 第一章 中世南薩摩の港・川・道
- 第二章 中世万之瀬川下流域の様相について

第二部 南九州の港と唐坊

- 第一章 中世前期南九州の港と宋人居留地に関する一試論
- 第二章 唐坊再論
- 第三章 中世前期坊津像の形成と普及

第三部 万之瀬川下流域の領主たち

- 第一章 薩摩国阿多郡地頭鮫島氏系譜考
- 第二章 二階堂氏の所領と海上交通

第四部 国家周縁地域の比較史

- 第一章 中世日本の北と南
- 第二章 東北と琉球弧

－島尾敏雄「ヤポネシア論」の視界－

附論 モンゴル襲来と近代の地域社会

終章

- 一 本書のまとめ
- 二 課題

次に研究史の整理を行い、本書の位置づけを明確にしておく。本書にかかわりをもつ分野としては、次のものが考えられる。

① 南九州史研究

② 万之瀬川下流域の研究

③ 海上交通史研究、港町研究

④ 対外交流史研究、とりわけ日宋貿易史の研究

さらに本書を執筆するうえで、常に念頭におき、意識していたのは、一九八〇年代後半から北海道・東北地方を中心に進められていた、いわゆる「北からの日本史」、「北方研究史」であった。端的にいえば「南からの中世史」というものを構築できないかという思いであり、また、中世日本国の南と北とを比較するという問題意識である。

1980年代、東北大学が地域史研究拠点となり、平泉研究も本格スタート

このような視点を、柳原教授は、どのように形成、発展させてきたのでしょうか。

日本史の研究者には、職を得て住んでいる地域に対して、史料を発掘するとか、研究をするとかのことで関わっていくことは一種の責務ではないかという意識があります（しかし柳原教授は学生には、そのようなことを求めようとはしていません。これから基礎をつくり、視野を広げて行かなければならない学生の方向を狭めてしまうと考えるからです）。

地域の歴史を研究する営為を指して、これまで「郷土史」「地方史」といった言葉がありました。「郷土史」は「お国自慢」「故郷自慢」としての性格が強く、「地方史」には先進的な「中央の歴史」に対する後進的な「地方の歴史」という意識が抜け切らないところがあります。そのような反省から立ち上ってきたのが、「地域史」という視点です。「地域史」では、中央を相対化し、差異を地域

の特性であると考えられることになります。

1978年、大石直正（東北学院大学文学部教授、入間田宣夫（山形大学教養部助教授）、遠藤巖（秋田大学教育学部助教授）、伊藤喜良（山梨県立女子短期大学助教授）、小林清治（福島大学教育学部教授、藤木久志（立教大学文学部教授／以上いずれも当時の肩書き）という東北大学文学部・文学研究科で豊田武博士（1910-80／1947-73）の間文学部教授門下で学んだ研究者が集まって『中世奥羽の世界』（東京大学出版会）を刊行したのが、東北における本格的な中世地域史研究の始まりと言えるでしょう。

1980年代に入ると、「国際化」「ボーダーレス化」などを背景に、国家の枠組みを相対化し、視野を東アジア、東北アジアにまで広げること新たな歴史像を描こうとする方向へ発展。1986年には、「前近代における地域・民族・国家を考える―北から見

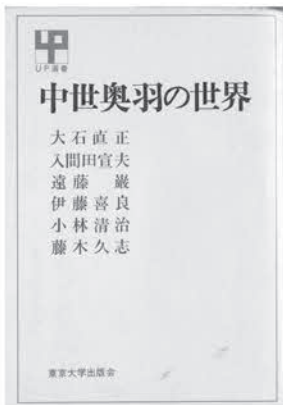
た日本史像の再構成をめざして」と題して開かれた「函館シンポジウム」が開催され、1988年には『北からの日本史』の書名でシンポジウムの内容がまとめられ、研究の方向性が明確なものとなりました。

そのような中で、北と南の周縁部・境界領域ともいえる地域に意外な共通点があることも明らかになり、同じころ、考古学の藤本強氏（東京大学）は、弥生時代・中世の日本列島を「北の文化」「中の文化」「南の文化」と区分する考えを打ち出し、その中間地帯（「ボカシの地域」と表現も含めた北と南の類似性を指摘していました）。

柳原教授は、このような研究潮流の中心にあった東北大学で、学部・大学院の学生

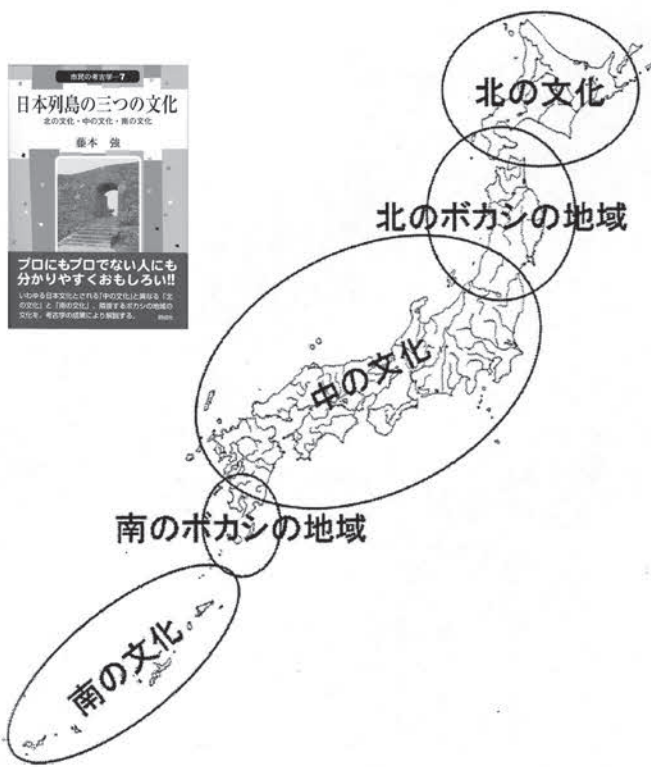
として変化の時代を体験していたのです。文学研究科での恩師である羽下徳彦教授（在職1976-97）が研究代表者となった『北日本中世史の総合的研究』が1986年に始まり（1987年）、柳原教授は研究補助者として参加することができました。また、1988年に始まった平泉「柳の御所」発掘の現場にも何回か足を運び、壮大な政庁跡が姿をあらわし、中世世界における平泉藤原氏の位置が明らかにされていく様子も目にしていました。（余談ですが、世界文化遺産登録が決定した平泉において、浄土世界というコンセプトとの関係で、政治の場である柳の御所跡がはずされたのは残念なことだと柳原教授は考えています。）

と



東北における地域史研究の画期となった『中世奥羽の世界』と『北からの日本史』

■藤本強氏が提起した「北の文化」「中の文化」「南の文化」のイメージ図（同成社『世界の考古学⑦日本列島の三つの文化』より）



「世界史」とつながる地域史研究へ

1990年、柳原教授は、鹿児島大学にポストを得て赴任します。「北からの日本史」研究勃興の火中にいた柳原教授は、以後、東北における「北からの中世史」に対して「南からの中世史」を強く意識するようになります。

その経緯は、『中世日本の周縁と東アジア』「あとがき」の中に

鹿児島に着任してみると、五味克夫先生をはじめとする方々によって史料発掘が進み、信頼できる史料集も相当数刊行され、研究基盤がととのえられていた。熱心な会員が集まる鹿児島中世研究史研究会もあった。そして「北からの日本史」に刺激を受けつつ、「南からの日本史」を構想し、具体化を始めていた野口実氏や永山修一氏がいらした。まさに願ったりかなったりの状況であり、私も講義や実地指導という授業で意識的に地域の素材を取り上げるなど、なんとか初心を成就させようと努力してみた。しかし具体的な成果はあがらなかったのである。地域史研究に踏み出すきっかけを得ることでできたのは、もうまもなく鹿児島を去るというところであった。

と記されています。

そのきっかけとなったのが、1998年の『日本歴史地名大系』鹿児島県の地名（平凡社）の編集・執筆であり、より決定的なのが1996年夏の金峰町教育委員会による持鉢松遺跡の発掘でした。この遺跡からは、

12〜13世の中国製陶磁器が大量に出土し、万之瀬川下流地域に海外とも連絡する一大交易拠点があったことが考古学的に示され、大きな注目が集まったのでした。

柳原教授は、1997年、東北大学文学部へと移籍。1997年に刊行された村井章介氏他編集の『境界の日本史』（山川出版社）に「西の境界領域と万之瀬川」、1999年刊行の藤原良章・村井章介氏編集の『中世のまちと物流』（山川出版社）に「中世前期南薩摩の湊・川・道」などを発表して、「中世日本の周縁と東アジア」につながる研究を本格的に始動させました。年に数回、万之瀬川下流地域で調査を実施し、現地を歩き回るなかで中世史料はもちろんのこと、近世の地誌、古地図、地籍図、伝承などを網羅的に集め、中世の様相を復原する作業に没頭しました。この中で特に印象深いのは、万之瀬川下流地域にある「唐坊」（チャイナタウン）を示すという地名が、九州各地に多数あることを発見し、平安・鎌倉時代の日中交流について地域の視点から新しい学説を提起したことだといえます。地名という小さな手がかりから、壮大な人や物の流れが見えてきたことになります。

そして2002年に編者として『鎌倉・室町時代の奥州』（高志書院）をまとめ、2004年に『日本史講座4 中世社会の構造』（東京大学出版会）に「中世日本の北と南」を発表、平泉についても入間田宣夫編『平泉・衣川と京・福原』（高志書院、2007年）、『季刊 東北学』16号（2008年）の特集「平泉、一万年の系譜のもとに」に寄稿するなど、東北地域史への発言も強めたのです。

このような研究から広がる世界について、柳原教授は『中世日本の周縁と東アジア』「序章」で、

凡そ何処にフィールドを求めようと、地域史研究が当該地域で完結することはありえない。一つの地域に深く沈潜することで、かえってその地域と他の地域とのつながりが見えてくるはずである。その広がり、

列島レベルとなり、やがて「国境」を超えて、東アジア規模のものとなる。やや大げさにいえば、あらゆる地域史研究は「世界史」（東アジア史）とつながるのであるし、逆に地域史研究なき「世界史」は成り立たない。本書はかかる問題意識を根底にもった地域史研究の成果の一端である。

と明言しています。



■柳原教授作成の
中世前期万之瀬川下流地域
復原概念図



——は道、-----は阿多北方、阿多南方、加世田別府、河辺郡の境界。
ただし、検討の余地が残されている。万之瀬川の旧河川については『加世田市史』（加世田市、1986年）224頁以下を参考にした。

島尾敏雄の『琉球弧の視点』への注目

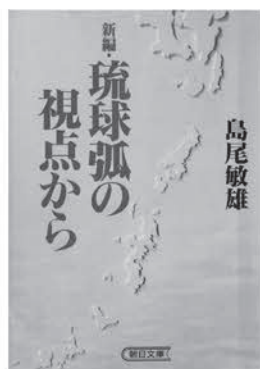
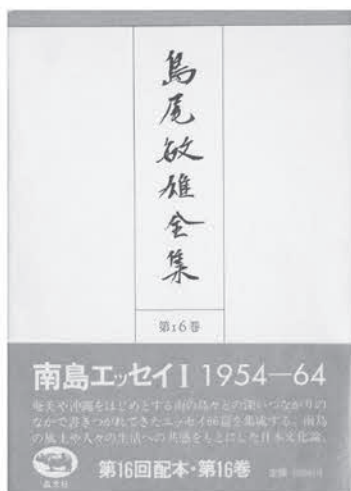
『中世日本の周縁と東アジア』のほぼ結びともなっている第四部第二章は、「東北と琉球弧—島尾敏雄『ヤポネシア論』の視界」となっています。

島尾敏雄（1917-86）は、東北（福島県南相馬市小高区）出身の両親の間に横浜で生まれ、九州帝国大学で学び、奄美群島加計呂麻島で特攻隊長として終戦を迎え、結婚後、奄美大島・鹿児島に住んだ文学者です。1960年代から一種の日本文化論であるヤポネシア論を提起したことで知られています。柳原教授は、島尾が、日本列島は東北・中央・琉球弧の三つの部分で構成されていたと提起し、「北海道も東北もそして琉

球弧も等距離で見渡せるような場所から日本を見たいものだと思う」と語っている視点への共感を示した上で、

昨今、「いくつもの日本」という歴史の見方が盛んにいわれる割には、その先駆である島尾のヤポネシア論をきちんと位置づけようという気配はあまり感じられない。特に島尾と同じような問題意識をもって研究を進めてきた東北史の研究者からは、全く顧みられない存在になっている。それではないのだろうか。

と記述。



南島エッセイを収録した『島尾敏雄全集』第16巻、『琉球弧の視点から』

「島尾の議論を内在的にたどること、地域や周縁の視点から日本列島の歴史を考えようとした歴史学・考古学あるいは民俗学の研究との関係で島尾の位置を確かめること、島尾の議論の限界を見極めること等々」への決意を示しています。

柳原教授は、学界の現状については、「南と北の類似性についての研究が具体性をもつて浮かび上がってきた。とくに両世界それぞれにおいて、人と物の交流が非常に活発に行われ、社会的に重要な意味をもっていたことが明らかにされた意義は大きい」ととらえ、

東北の研究者が南の世界におけるカムイヤキ（類須恵器）、夜光貝大量出土遺跡、グスク等に関心をもち、一方、琉球弧の研究者が北の世界における五所川原窯須恵器、防御性集落等に関心を寄せるということも起きている。今後は、日本国と南・北両世界の接点にあたつたと考えられる喜界島の城久遺跡群、青森市の新田（一）遺跡の発掘が相互に注目されるに違いない。

と見えています。琉球弧の視点なども踏まえた柳原教授の次の成果が発表される機会を注目して待つことにしましょう。

次のステップへ、地域の史学史という視点

北からの中世史、南からの中世史の研究を深め、地域史をさらに豊穡なものにするために、柳原教授は今、地域の史学史という新しい課題に挑んでいます。たとえば東北大学法文学部卒業後、秋田家文書の整理に携わった大島正隆（1909-44年）に着目。2010年には、『国史談話会雑誌』51に、五人の研究者とともに『東北大学史料館所蔵『大島正隆文書目録』を掲載。2011年には『東北大学史料館だより』5月号（No. 14）に『東北中世史の旅立ち』を告げる資料群——『大島隆正文書』に寄せて——を発表しています。

「史学史」とは、歴史学の歩みを、それととりまく社会や政治の動きとも関連させながらたどることです。学説を一つの歴史認識として突き放してみることで、現在の研究ひいては自分自身の研究を客観的に評価するよすがとなります。柳原教授は、自身の専門領域である中世地域史研究の始まりと深まりを探る一つのきっかけとして、大島正隆と彼の遺稿・遺品群——大島正隆文書に着目しているのです。

大島正隆の活動期間は非常に短いものでしたが、死後、1987年に『東北中世史の旅立ち』として一冊の書物にまとめられています。

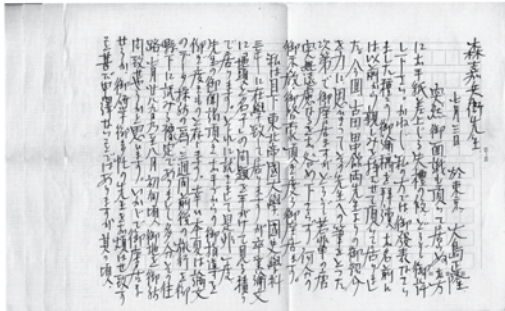


東北大学史料館だより

No.14 2011 Mar.

ISSN 1347-6221

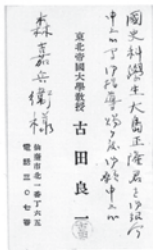
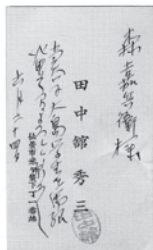
TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 「東北中世史の旅立ち」を告げる資料群
—「大島正隆文書」に寄せて—
東北大学大学院文学研究科教授 柳原敬昭
- 5 企画展 開催報告
「せんだい学生スポーツの黎明」
資料の公開について
- 6 史料館のうごき
- 8 お知らせ

上 森嘉兵衛あて大島正隆書簡
(昭和13年7月3日付)
下右 同封されていた名刺①
古田良一 (国史教授、大島の指導教官)
同左 同封されていた名刺②
田中鑑秀三 (法文学部地理学講師)



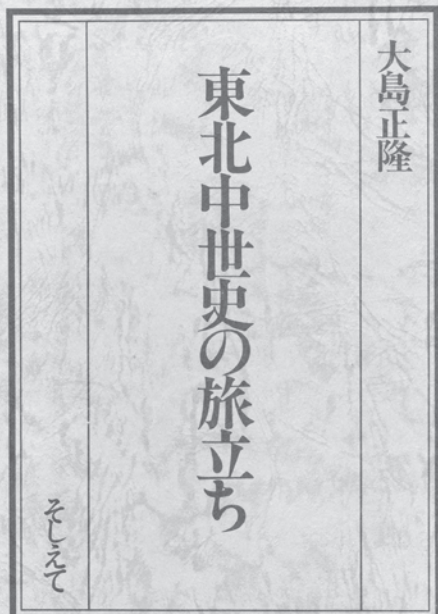
「どうぞ若輩の唐突無遠慮なるをお咎め下さらず」 —出会いを求める手紙—

ここに紹介するのは昭和13年(1938)7月、当時東北帝国大学3年生だった大島正隆が、森嘉兵衛(もり かへえ 1903~81)に初めて送った手紙です。森は盛岡出身で、日本近世史や農業経済を専門とし、実地に足を運んで庶民の暮らしや文化、地方経済の実態などを徹底的に調査する学風で知られていました。3年前に出版した『旧南部藩に於ける百姓一揆の研究』が高い評価を得て、精力的に研究を進めていた頃でした。

大島は手紙の中で、卒業論文は地主の農民支配の問題を扱いたいので、是非一度会って指導を仰ぎたいと述べています。「鈍なる者ではありますが、御指示下さる事に対しては精一杯の努力と真実とを尽くしたく存じて居ります」といった記述や、大学で指導をうけていた教官たちの紹介状代わりの名刺は、戦前の学問世界の雰囲気と、若い学徒の緊張感を漂わせています。

この手紙を含む大島書簡等が、つい最近森氏ご遺族から史料館に寄贈された結果、当館所蔵「大島正隆文書」の総点数もその分増加することになりました(詳しくは本文)。

- 1 -



上は柳原教授の「『東北中世史の旅立ち』を告げる資料群—『大島正隆文書』に寄せて—」が発表された『東北大学史料館だより』2011年5月号。表紙を飾るのは大島正隆の森嘉兵衛宛書簡。左は大島正隆「東北中世史の旅立ち」

す。柳原教授は、「『東北中世史の旅立ち』を告げる資料群」において、「才能に恵まれ、東北中世史研究の開拓者となった大島」と評価した上で、

戦国・織豊期研究の牽引車である藤木久志氏(立教大学名誉教授)は、「ごく最近の文章で、大島論文との邂逅がなければ『私の大名

研究は不可能だった」と述懐されている(「初学のころ『追慕三十年 豊田武先生を偲ぶ』」。このこと一つをとっても、大島の研究の重要性が知られる。学界のスーパー스타ともいえる網野善彦・石井進両氏が「旅立ち」の書評・紹介を執筆されていることも付言しておこう。

と記しています。

東北大学には、附属図書館に大島正隆が整理した秋田家史料、史料館に大島正隆文書が所蔵されています。さらに2010年7月以降、柳原教授の研究が一つのきっかけとなって、史料館に大島の家族宛書簡、森嘉兵衛(岩手師範・岩手大学教授、東北近世史の泰斗)宛書簡合わせて約150通が寄贈され

ました。これらの中には大島の学問形成ひいては東北中世史研究の成り立ちを考える上で不可欠の情報が多量に含まれています。史学史を著書・論文といった公表された成果からだけでなく、研究者自身の肉筆原稿やメモ・書簡を素材に研究することは学界全体を見渡しても始まったばかりというところで

柳原教授は、これらの資料に分け入り、東北における地域史研究の歴史の一画に光を当てようとしているのです。



東北大学は1907年(明治40)6月22日に創立し、文学部の前身である法文学部は1922年(大正11)に開設されました。2007年、東北大学は創立百周年を迎え、さまざまな記念行事が開かれました。次の100年へ、東北大学はどう変わって行くのか。文学部・文学研究科の動向にご注目ください。

文学部へ行こう

2011.3.11 “東日本大震災”を乗り越えて

2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源地として東北・関東地方を襲ったマグニチュード9.0、最大震度7の地震と津波は、青森・岩手・宮城・福島・茨城・千葉という太平洋岸地域を中心に未曾有の被害をもたらしました。幸いなく、仙台市中心部に被害は少なく、東北大学も施設・設備等に被害があつたものの、大学業務も授業も通常の状態に戻ってきています。

そして、6月中旬現在、死者1万5千名、行方不明者7千五百名、被害総額17兆円というこの災害に対して考える必要があります。大学の知に何ができたのか、何ができなかったのか。今後の復興、防災に向けて何を考え、何をすべきか。井上明久総長が、東北大学(緊急連絡)ホームページの4月25日付け

「東北大学始動宣言」で(歴史上かつてない未曾有の大災害に対して、復旧や復興それ自体が目標ではなく、「安全・安心社会の創生」を目指す新たな人類社会のパラダイムシフトが求められています」と語っているように、つきつづけられている課題は非常に重いものになっています。



東北大学では震災直後から震災関連の特別ホームページが開設されました

文学研究科・文学部として災害ボランティアへの呼び掛けも

なお、この間、東北大学では学生・院生有志による全学的災害救援ボランティア組織として「東北大学地域復興プロジェクトエナジー」(<http://tohokugakuseifukko.blogspot.com/>)が組織されました。

文学研究科・文学部としても、これに賛同し、公式サイトにおいてボランティア活動への積極的な参加を呼びかけ、ボランティア活動に参加する際の注意事項もアピールしました。



HARUのホームページで活動の様子を知ることができます

News 1 5月6日、1カ月遅れの入学式・オリエンテーション

そのような中、東北大学では5月6日、例年よりもほぼ1カ月遅れで学部ごとに入学式が行われ、同日の学部オリエンテーション、7日の全学オリエンテーション、新入生特別セミナー、新入生歓迎行事、9

日の教養教育特別セミナーによって2011年度新入生の学事がスタートしました。

文学部では、5月6日は13時からマルチメディア教育研究棟を会場としての入学式、オリエンテー

ションが行われました。黙祷が行われた後、総長によるビデオメッセージが伝えられ、大淵憲一学部長からは左記のような挨拶がありました。



井上総長によるビデオメッセージ



5月6日、文学部入学式は、黙祷で始まりました



大淵学部長の挨拶



5月7日の文系4学部・薬学部の合同オリエンテーション



入学式の後には各クラスに分かれ、クラスアドバイザーから文学部での学習についての説明がありました



その後、各自が関心のある専修の研究室を訪問しました



9日から授業がスタート。午後には、教養教育特別セミナーで教養(リベラルアーツ)の重要性について講話、パネルディスカッションが行われ、新入生は東北大学での学習に踏み出しました



新入生の元気に教員の方が励まされました

7日は10時から、川内北キャンパス体育館を会場に、教育学部・法学部・経済学部との合同の全学オリエンテーションと、それに続く新入生セミナー。東北大学でどのような理念で、何を、どのように学び、学生生活を送っていくかが丁寧に説明されました。

この間、川内北キャンパス講義棟では、学友会新入生歓迎実行委員会による新入生歓迎文化フェスティバルも開かれました。

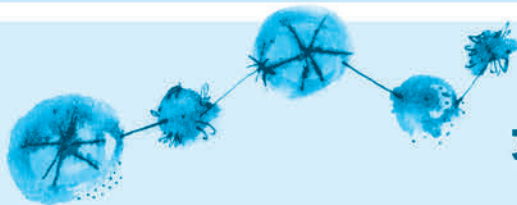
9日13時からは、川内キャンパスのマルチメディア教育研究棟を会場としての教養教育特別セミナー

■入学式における文学部長の挨拶(抜粋)

井上総長のメッセージにもあったように、東北大学は被災校として自らの再建に努力すると共に、東北地方の復興においても中心的な役割を果たす義務があります。文学部の学問研究の成果は、家造ったり、道路を造ったりなど、目に見える形でそれに貢献するものではありません。被災者の様子を放送したメディアを通して、困難な状況の中でも礼節、優しさ、希望を失わない日本人の姿が海外から賞賛されました。そうした報道には多少誇張があり、また必ずしもそうではない面もあったのですが、16年前に発生した神戸の大震災でも海外メディアから同様の賞賛を受けております。もしも日本人にこうした美徳があるなら、それは単に風土や民族性によるものではなく、日本人が長い時間をかけてつくり上げてきた教育と文化の賜です。この点にこそ、文学部がその教育研究活動を通して震災復興と日本の再建のために貢献する道があります。この大震災のことを皆さんは、忘れようと思っても忘れることはできないでしょう。しかし皆さん自身は勉学の際、震災復興のため、といったことを特に意識する必要はないと思います。この震災の市で充実した大学生活を送ることを、自らが学問的課題を発見してこれに全力で取り組む。長い目で見れば、こうした皆さんの学業を深める行為そのものが、震災復興と日本の再建につながるものと私は信じています。私たちにとても、皆さんのような前途ある若い方々に対してその可能性を引き出し、発展させるよう支援することが、何よりも今やるべき使命であると思います。

がありました。「教養とは?—東北大学生に考えてほしいこと」と題し、教養教育院に所属する3名の総長特命教授が教養教育の歴史、物理学と教養、教養の三層構造をテーマに、東北大学が考える教養(リベラルアーツ)について語り、パネルディスカッションで新入生の質問に答えることで、東北大学での全学教育が始まりました。

大学院文学研究科も、5月6日10時30分から入学式とオリエンテーションを行い、10日から授業が始まりました。



文学部へ行こう

News 2

2011年度 「オープンキャンパス」は、 7月27日・28日に決定

東北大学では、毎年7月末、受験生のためにオープンキャンパスを開催。川内(文学部・教育学部・法学部・経済学部)、青葉山(理学部・薬学部・工学部)、星陵(医学部・歯学部)、雨宮(農学部)のキャンパスをまわり、模擬授業・研究室や附属施設見学、先輩との交流などによって東北大学のありのままを実感できるようにしています。その内容が充実しているため、国公立大学の中では最も多くの高校生が参加するものになっており、2010年には、ついに5万人を超えました。



2011年度もまた、例年どおり7月末の7月27日(水)・28日(木)に開催することが決まりました。文学部では、25ある分野の研究室や資料室を公開し、文学に志す高校生を待っています。

News 3

2011年6月、 「青春のエッセー」阿部次郎記念賞の 募集開始

2010年11月3日、第4回「青春のエッセー」阿部次郎記念賞の選考結果報告会が行われました。全国の高校生(高専1〜3年も含む)を対象に募集を行い、歌人の俵万智さんをゲスト選考委員に迎え、270点を厳正に審査した結果、左記のような結果となりました。



選考結果報告会では、選考委員から講評が述べられました。「カフカとの対峙」で自由作品の部優秀賞に輝いた阿部晃士さん(仙台東高校)、「そこにある」で自由作品の部入選だった石川里奈さん(仙台育英学園秀光中等教育学校5年)も来場され、受賞・入選の感想と今後の抱負を語ってくれました。

そして2011年6月、第5回「青春のエッセー」阿部次郎記念賞の募集を開始しました。作家の森まゆみさんを特別審査員に迎え、「課題作品の部」は「希望」という題で投稿を募集しています。ふるってご応募ください。

課題作品の部

課題:「記念日」

●最優秀賞

山田志桜里さん(福岡・西南学院高校2年)
「虹の橋記念日」

●優秀賞

工藤 綾香さん(静岡・沼津東高校3年)
「敗戦記念日」
佐藤 栞さん(青森・青森高校1年)
「母と私の絆記念日」

自由作品の部

●最優秀賞

西村 夏紀さん(兵庫・長田高校2年)
「黒猫カウンセラー」

●優秀賞

阿部 晃士さん(宮城・仙台東高校3年)
「カフカとの対峙」
大西野乃子さん(兵庫・加古川東高校3年)
「私の沖縄回想」

学校賞

兵庫県立加古川東高等学校
宮崎県立宮崎大宮高等学校

News 4

有備館講座、齋理蔵の講座、リベラルアーツサロンの開催

文学部では、研究成果を地域に役立ててもらうために、二つの市民公開講座を開いています。一つは宮城県北の大崎市岩出山町での「有備館講座」、もう一つが県南の丸森町での「齋理蔵の講座」です。2011年度もまた、次のような日程で講座を開催しています。

また、教育学部・法学部・経済学部・東北アジア研究センターとの連携により、参加者との語らいの場を設ける「リベラルアーツサロン」も開催します。2011年度は、6月10日の文学研究科・芳賀京子准教授によるお話「美しきヒトのカラダ」ギリシア彫刻の裸体」会場…東北大学附属図書館をスタートに左記のような日程で開かれています。

有備館講座(第10期) 問合せ先 ☎0229-72-0357 (大崎市岩出山公民館スコーレハウス)

テーマ <男>と<女>

- 5月14日 高橋章則准教授「表現される遊女から表現する遊女へ〜19世紀江戸吉原の世界〜」
- 6月18日 佐竹保子教授「李清照と趙明誠〜古典中国最高の女流詩人とその夫〜」
- 7月16日 横溝博准教授「平安文学の<男>と<女>」
- 8月20日 大藤修教授「江戸時代の家と村における男と女」
- 9月17日 尾崎彰宏教授「西洋美術にあらわれた<男>と<女>」

齋理蔵の講座(第4期) 問合せ先 ☎0224-72-3036 (丸森町教育委員会・生涯学習班)

テーマ <男>と<女>

- 6月4日 阿部恒之教授「見た目の違いと心の違い」
- 7月2日 小泉政利准教授「もろい男としぶとい女:こぼの認知脳科学」
- 8月6日 佐倉由泰教授「文学表現における<男>と<女>—真名と仮名をめぐって—」
- 9月3日 才田いずみ教授「あたし」と「おれ」
- 10月1日 斎藤倫明教授「日本語の語彙に見られる『男』と『女』」

リベラルアーツサロンの前期日程 問合せ先 ☎022-217-4977 (東北大学広報課)

●7月15日

東北アジア研究センター・高倉浩樹准教授
「極寒地で暮らす方法とは?〜北極圏トナカイ遊牧民の知恵と技術から学ぶこと〜」
(東北大学附属図書館)



文学研究科・芳賀京子准教授

●9月2日

国際文化研究科・宮本正夫教授
「認知科学としての仏教」
(東北大学附属図書館)



News 5

10月8日、104周年ホームカミングデー開催予定

2010年10月9・10日、東北大学の103周年ホームカミングデーが開かれ、校友会総会、仙台セミナー、在校生と卒業生の親睦会、秋の文化フェスティバル、記念コンサートなどが行われました。

この仙台セミナーでは、「東北の精神(こころ)」が「場」が生み出す価値と選択」というテーマで、仙台在住の直木賞作家・伊集院静さんが「東北の文化性」と題する特別講演をされ、続いて東北大学東北アジア研究センター・平川新教授の講演「なぜ政宗は仙台を選んだか」が

宗の国造りにみる「場の思想」、文学研究科・鈴木岩弓教授の講演「生者と死者が出会う場所—霊地からみた東北の精神世界—」があった後、討論も行われました。鈴木教授は、青森県下北半島の霊地・恐山の例を示して、場所や形にこうでなければならぬという共通性や限定もなく、死者を祀るための行為が多様に行われていることなどを語りました。

2011年度もまた、10月8日に、104周年ホームカミングデーを開催することが決定しています。

News 6

11月3日、例年どおり「紅葉の賀」も開催

2010年11月3日、毎年恒例の東北大学市民オープンキャンパス「紅葉の賀」が、東北大学植物園を会場に開かれました。

午前の部は野点、東北大学邦楽部による演奏、植物園散策等。午後からは会場を文学部第一講義室に移し、公開講演会「青春のエッセー—阿部次郎記念賞」の選考結果報告、俳句会授賞式というプログラム。公開講演会では、佐倉由泰教授の「古典文学に見る、萩の名所宮城野の成り立ち」、大橋広好東北大学名誉教授・元東北大学植物園長の「ミヤギノハギの植物学的正体は…」

萩二題で盛り上がりました。

なお、市民公開講座「齋理蔵の講座」の会場となっている丸森町から多数の参加者があったことが、2010年度のトピックスとなりました。文学部では2011年度もまた、例年どおり11月3日に、東北大学植物園等を会場にて「紅葉の賀」を開く予定です。天然記念物にも指定されている植物園の植物や生物たちは、東日本大震災にもビクとせず、力強く生きています。今年度は、その生命力とふれあうことも大きなテーマとなるのではないでしょう



川内南キャンパス、文系4学部に隣接する東北大学附属図書館は、1号館(一般書籍利用)の利用が平日8:00～22:00、土日祝日10:00～22:00、2号館(雑誌類)の利用が平日8:45～17:00、土日祝日休館となっています。問合せ等は、Tel. 022-795-5943 [e-mail] main-counter@library.tohoku.ac.jp [URL] http://www.library.tohoku.ac.jp



片平丁キャンパス時代の附属図書館学生閲覧室(東北大学史料館所蔵)

1907(明治40)年の東北帝国大学創立の4年後、1911年6月14日、片平丁キャンパスに附属図書館が設置されました。大正昭和初年頃には、現在の東北大学史料館の建物の中に閲覧室がありました。現在、その蔵書は本館だけでも和漢書約145万冊、洋書112万冊、和洋雑誌4万1000点にのぼり、医学分館、北青葉山分館(理学・薬学キャンパス分館)、工学分館、農学分館まで含めれば385万冊の図書、7万8000点の雑誌を所蔵する一大資料館となっています。

創立100周年を迎えた東北大学附属図書館へ行こう

東北大学附属図書館では、100年という節目を記念して「創立百周年記念サイト」もオープン。もともと近くに「煌めいて遠くへ」のキャッチフレーズのもと、各種記念企画を実施しています。6月14日には、図書館へのメッセージをカードに書くくと記念日限定グッズがプレゼントされました。



6月14日、附属図書館でメッセージカードを書いた人に記念グッズが提供された

10月7日～11月5日、創立100周年企画展「煌めきのコレクション」未来への贈り物」

そして10月7日～11月5日には、附属図書館1階展示室で記念展が開かれます。

「煌めきのコレクション」未来への贈り物」と題して、図書館に所蔵されている多彩なコレクションの展示などが企画されています。

東北大学では10月8日には104周年ホームカミングデーが予定

されていますが、参加者にとって、東北大学とふれあうチャンスが例年よりも増えるのではないのでしょうか。



10月15日、川内萩ホールで瀬名秀明さんの記念講演会

また10月15日(13時30分～15時)

には、同窓生の作家・瀬名秀明さん(薬学部卒、元工学研究科特任教授)の記念講演会が開かれます。(東北大学百周年記念会館川内萩ホール) 瀬名さんは、「ロボットとの付き合い方おしえます。」(2010年10月)で東北大学のロボット研究者たち(工学系の堀切川一男教授・石黒章夫教授・田所諭教授を、「世界一敷居が低い最新医学教室」(2010年4月)で東北大学の医学研究者たち(医学系の辻一郎教授・柿崎真沙子助教・川島隆太教授、医学系の田中徹教授・和田仁教授・早瀬敏幸教授・石井純夫さん等)を紹介。2011年3月には『のび太と鉄人兵団』を著すなど、多彩な執筆活動

で注目の作家です。

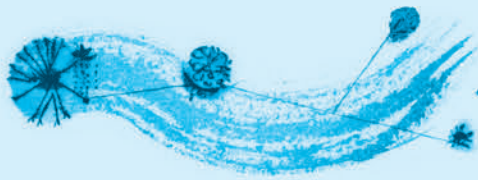
科学と人間のかかわりをテーマとした講演会には、期待が高まります。



東北大学ゆかりの人々の本コレクションコーナー開設

この間、附属図書館1階フロアには、「東北大学ゆかりコレクション」コーナーが常設されました。芥川賞・直木賞作家の北杜夫(医学部卒)、津本陽(法学部卒)、中村彰彦(文学部卒)、佐藤賢一(文学研究科修了)や、伊坂幸太郎(法学部卒)、瀬名秀明(薬学部卒)といったベストセラー作家の本が並んでいます。

文学部・文学研究科関係者では、青木美智男(歴史学)、有馬哲夫(社会学)、木田元(哲学)、今野勉(脚本家)、山折哲雄(宗教学)、松長有慶(宗教学)、前田勉(思想史)など多くの同窓生の書籍が並び、日に日に点数も増えています。(この項、敬称略)



東北大学附属図書館は、学外者でも登録して利用カードを持てば入館して閲覧することも、2冊ずつ借り出すこともできます。同窓生の場合は、全学同窓会「校友会プレミアム会員」となれば10冊まで借り出すことができるようになります。



図書館 1 階に常設された「東北大ゆかりコレクション」コーナー (6月末現在)

『江戸の遊び—けっこう楽しいエコレジャー』は、東北大学附属図書館が宮城県図書館と共同で2006年に実施した江戸時代の遊びに関する企画展示の図録であり、掲載された資料の多くが「狩野文庫」の収蔵品です。



『姫国山海録』は、江戸時代に発行された妖怪本です。ストラップは蛙に似た信濃青沼の蟲の妖怪、アートシールは建長寺の蟲、加賀の魚、丹波笹山の蟲、お茶の水の怪物、津軽の生き物などの妖怪を形にしています。



多彩な江戸資料も所蔵する 狩野文庫



東北大学川内北キャンパスの生協書籍部には、狩野文庫の中の江戸時代の遊びに関する資料をまとめた図録『江戸の遊び—けっこう楽しいエコレジャー』、狩野文庫の中の『姫国山海録』の妖怪をストラップやアートシールに展開した「狩野文庫グッズ」などが並んでいます。

この「狩野文庫」は、東北大学附属図書館が所蔵する、約十万八千冊に及ぶ狩野亨吉(かのうこうきち)博士の蔵書です。

狩野亨吉(1865-1958)は、秋田県大館市(当時、大館町)出身。東京帝国大学理科大学、同文科大学を卒業し、京都帝国大学教授・同文科大学長などを歴任し、安藤昌益を見いだした研究者です。狩野博士に関する著述で、入手可能な文献としては吉田正著『増補 狩野亨吉の思想』(2002年平凡社ライブラリー)がありますが、その中の「大蒐書家 狩野亨吉」の項には、「(生きていたうちに一冊の著書も出さなかった狩野亨吉は、それにふさわしい構えで本とむき合っていた。)<ときには地方へ出かけ貨車一両分といった買い方をしている。>といった記述があります。蔵書は、日本と世界の、人文科学と自然科学の、古今の多彩な資料に及んでいます。

東北大学では、1912(大正元)年、1923(大正12)年、1929(昭和4)年、1943(昭和18)年の四次にわたり、この蔵書を購入もしくは寄贈によって受け入れ、収蔵するに至りました。1937年に東北大学附属図書館が作成した『狩野文庫概説』で、文学部・村岡典嗣教授が「(狩野文庫が学術的に和漢書の大寶庫であることは明らかであり、本館の和漢書は實に本文庫を中心として之を増補しつゝ、累年完成に向かつてを。さればその學内に於いて利用され、関係諸方面の重要な研究資料となつてゐることは言ふまでもないが、學外に於いても相應に知られ、篤學者の本文庫閱讀を主たる目的として來館する向も、年々に多きを加へる。)<と記しています。今から七十年以上も前から、狩野文庫の名声は世に広まり始めていたことになります。

